

親が子どもの将来の年収に与える 影響¹

－習慣や行動の観点から－

青山学院大学

安井健悟研究会

教育分科会

星野愛美莉

池上祐樹

西條栞

佐藤大地

都築葵

2017 年 11 月

¹本稿は2017年12月2日、3日に開催されるISFJ日本政策学生会議「政策フォーラム2017」のために作成したものである。本稿にあり得る誤り、主張の一切の責任はいうまでもなく筆者たち個人に帰するものである。なお、本稿を作成するにあたり、アンケート調査及びデータを提供していただいたベネッセ教育総合研究所様、ご指導を頂いた安井健悟先生へ感謝の意を表する。

要約

本稿では、貧困が世代を通じて引き継がれている負の連鎖を断ち切り、家庭の金銭的事情によって子どもたちの将来が制限されない社会の実現を目標として研究を行う。

まず現状分析として、格差の世代間連鎖が深刻化していることを挙げ、所得格差における下位層に焦点を当て現状を述べる。今日の日本では、所得の階層において中流階級の人口が減少している一方で、下位層が増加していることや、日本の相対的貧困率が依然として高い数値であることをデータと共に示す。また世代間での格差の固定化や連鎖が教育格差を通じて生じていることを挙げ、こういったメカニズムで子どもにその格差が引き継がれているのか説明し、問題意識へと繋げる。

次にこのことを踏まえた先行研究を2つ挙げ、本稿の位置づけについて述べる。1つ目は親が子どもに対して行うしつけが子どもの所得に与える影響について研究したものである。2つ目は、幼少期の家庭環境や非認知能力が、労働市場における成果にどのような影響を与えているか検証したものである。先行研究の限界を踏まえて、親の所得や学歴、子どもの頃の生活の生活水準をコントロールすることや、子どもの将来所得について親の無意識的な習慣や行動に着目した実証分析を行う点に本稿の新規性がある。

子どもの将来の所得に影響を与える親の習慣や行動について探るため、実証分析を行う。今回用いたデータはインターネット上で行われたアンケート調査により集められたものである。被説明変数にはその回答者の現在の年収を置き、説明変数には回答者が子ども時代の親の様子や、親が重要視していたしつけなどを置き、学歴を統制した場合としていない場合の2段階に分けて統計ソフト Stata を用いた実証分析を行った。その結果、親が教育に熱心であることは子どもの将来の年収に正の影響を与えている一方で、しつけの厳しさや親が自らの仕事に誇りを持っていることは負の影響を与えていることが分かった。このことから親の価値観を子どもに押し付けることは、子どもの主体性に負の影響を与え、子どもの将来の所得を引き下げてしまうと解釈した。

実証分析の結果を踏まえ、親が子どもに価値観を押し付けることを抑制すべきであることを示し、政府が家庭内の教育に介入する難しさを考慮した政策を提言する。

I. 生徒主体の道德の授業の実施

II. 生徒の評価を行わない道德の授業の実施

以上の2つを新たな政策として提言する。これらの政策により、大人の価値観を押し付けず、子どもが主体的な思考や行動を行うことのできる教育を、家庭の代わりに学校にて行うことが可能となる。これらの政策によって子どもの非認知能力も向上され、結果的には子どもの将来の所得にも好影響を与えることが期待される。

目次

はじめに

第1章 現状分析・問題意識

- 第1節 格差の世代間連鎖
 - 第1項 格差の現状
 - 第2項 格差の世代間連鎖の現状
- 第2節 教育格差の現状
- 第3節 問題意識

第2章 先行研究及び本稿の位置づけ

- 第1節 先行研究
 - 第1項 幼児期のしつけと成人後の労働所得の関係
 - 第2項 幼児期の家庭環境や非認知能力と学歴、雇用形態、賃金の関係
- 第2節 本稿の位置づけ

第3章 実証分析

- 第1節 使用データ
 - 第1項 本稿に用いるデータ
 - 第2項 変数紹介
- 第2節 親の習慣、行動と子どもの将来年収の関係
 - 第1項 検証仮説および推定式
 - 第2項 分析結果および結果の解釈
- 第3節 親の習慣、行動と子どもの最終学歴の関係
 - 第1項 検証仮説および推定式
 - 第2項 分析結果および結果の解釈
- 第4節 男女分けて再分析
 - 第1項 推定式
 - 第2項 分析結果
 - 第3項 結果の考察

第5節 分析のまとめ

第4章 政策提言

第1節 はじめに

第2節 従来の道德教育

第3節 政策提言Ⅰ 生徒主体の道德の授業の実施

第4節 政策提言Ⅱ 生徒の評価を行わない道德の授業の実施

第5節 政策提言 まとめ

おわりに

参考文献・データ出典

はじめに

1970年代、日本は一億総中流社会と呼ばれ、日本国民の多くは世間一般からみると中流であるという生活意識を強く持っていた(厚生労働省(2013))。しかし、大竹・小原(2010)によると、1980年代から90年代にはバブル発生と崩壊が起こり、それと同時に人口高齢化に伴って所得格差が拡大した。また安井(2015)は、2000年から2013年にかけて、一時的な格差縮小はあったものの、それを除けば格差が拡大傾向にあることを明らかにしている。

一定の格差が生じてしまうのはやむを得ない。むしろ勉学に励むインセンティブとして、またよい職に就き懸命に働くインセンティブとして必要だと考えられる。しかし、この格差が子どもたちの機会にまで影響している現状は問題だろう。

文部科学省の『平成26年度子供の学習費調査』によると、世帯の所得が高いほど子どもにかかる補助学習費及び学校外活動費が高くなる傾向があり、経済的に困窮し子どもの教育のために費用を捻出できない家庭がある一方で、早期教育として小学校入学前から英語などの学習塾に通わせる富裕層も存在する。子どもの学習環境は親の所得に依存しており、子ども本人の力ではどうすることもできない。また、この格差は子ども時代に留まることなく、後述するデータでも示されているように低所得の親を持つ子は将来的に低所得になることで貧困に陥り、また反対に高所得な親を持つ子は将来的に裕福になるという格差の世代間連鎖によって子どもの将来にまで影響を及ぼしている。

子ども本人の責任とは無関係に、親の経済状況によって子どもの将来が決まってしまうという現状は大きな問題であり、改善していく必要がある。この親の所得格差が教育格差に繋がってしまっている現状にアプローチをかけようとしているのが、2017年に示された安倍政権の政策である。

現在、安倍政権は「人づくり革命」という看板政策を掲げており、その大きな柱として教育格差の是正を目的とした教育無償化の実現を目指している。具体的には幼児教育、保育を無償化することが検討されている。そのための財源確保として消費税を10%まで引き上げることも議論されている²が、現在の日本の財政は歳出が歳入を上回る状況が続いており³、既に莫大な財政赤字に陥っている。もし仮に増税を行った場合でも、日本の財政は苦しい状況であることは変わらないだろう。

このことを踏まえて我々は、限られた財源の中で行われようとしている教育無償化に加えて、財源に更なる負担をかけることなく、効率よく問題にアプローチできる方法を考えた。

今までの研究では親の所得や教育投資が子どもの将来に与える影響が多くなされているが、我々が今回注目したのは親の習慣や行動が子どもの将来に与える影響である。多くの子どもは学校や習い事、また友達と外で遊ぶ時間以外は親と共に家で過ごし、自然と親の姿を

² 首相官邸HP 平成29年10月26日記載

³ 財務省「日本の財政関係資料 平成28年版」

見て育つ。IQや学習テストで計測される認知能力は主に学校教育を通じて育まれる他に、中室(2015)によると、近年では忍耐性や社会性などの人間の気質や性格的な特徴のようなものを指す非認知能力が将来の年収、学歴や就業形態などの労働市場における成果にも大きく影響することが明らかになっている。

学校よりも多くの時間を過ごす家で見える、無意識な親の振る舞いが子どもの非認知能力の形成に影響を与え、結果として子どもの学歴や所得に影響を与えている可能性があり、このことが格差の世代間連鎖を助長している一因になっているのではないかと我々は考えたのだ。

この親の習慣や行動が子どもの将来に影響を与えているかどうか明らかにすることで、既に安倍政権で検討されている政策の効果をより一層高めるための、補完的な政策を提言することが可能である。

本稿は次のように構成されている。第1章では、現状分析として、格差の世代間連鎖が深刻化していることを挙げ、所得格差における下位層に焦点を当て現状を述べる。第2章では、親のしつけ、幼少期の家庭環境や非認知能力が、労働市場における成果にどのような影響を与えているか検証した先行研究を2つ挙げ、本稿の位置づけについて述べる。第3章では、子どもの将来の所得に影響を与える親の習慣や行動について探るため、実証分析を行い、得た結果を踏まえて考察を行う。第4章では、実証分析の結果を踏まえた政策提言を行う。

第 1 章 現状分析・問題意識

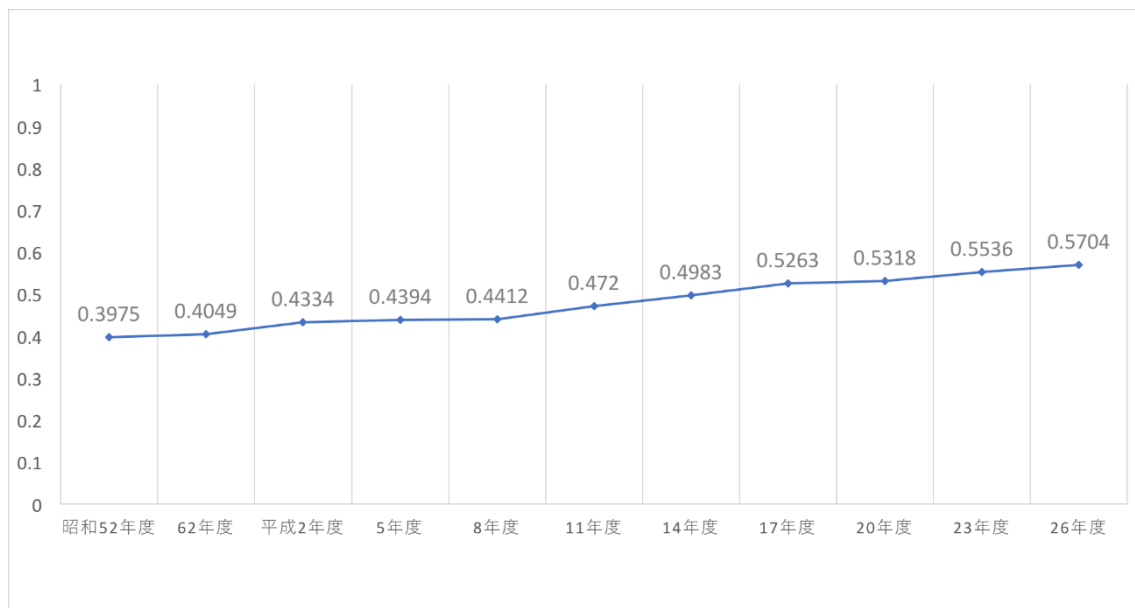
第 1 節 格差の世代間連鎖

今日、日本では所得格差の拡大が深刻化しており、これに伴い発生する子どもの教育格差が問題視されている。諸外国と同様に日本においても、学校教育は将来の所得に多大な影響を与えることが分かっている。事実、教育の収益率について議論推定している安井・佐野(2009)では、教育年数が1年増えると賃金が約9%増えるといった分析結果が明らかにされている。だとすれば、現在の日本において、子どもの学歴は彼らの将来の所得を大きく左右する。親の所得の差は、子への教育投資額の差を生み、そこでの差が子の学歴を通して将来の所得にまで影響を及ぼす。つまりは、親世代の格差を子どもが引き継ぐ格差の世代間連鎖が発生しているのである。

第 1 項 格差の現状

はじめに、親が直面している日本における所得格差の現状を整理していく。所得格差は、日本において長年問題視され続けている重要な社会問題であり、その現状を理解するにあたり、多く用いられるのがジニ係数である。ジニ係数とは、分布における不平等度を表す係数であり、0に近づくほど平等、1に近づくほど不平等であることを示す。図表 1-1 は日本のジニ係数の推移を示しているが、年々、ジニ係数は上昇を続けており、長期的なトレンドとしては格差が拡大していることが確認できる。

図表 1-1 ジニ係数の推移

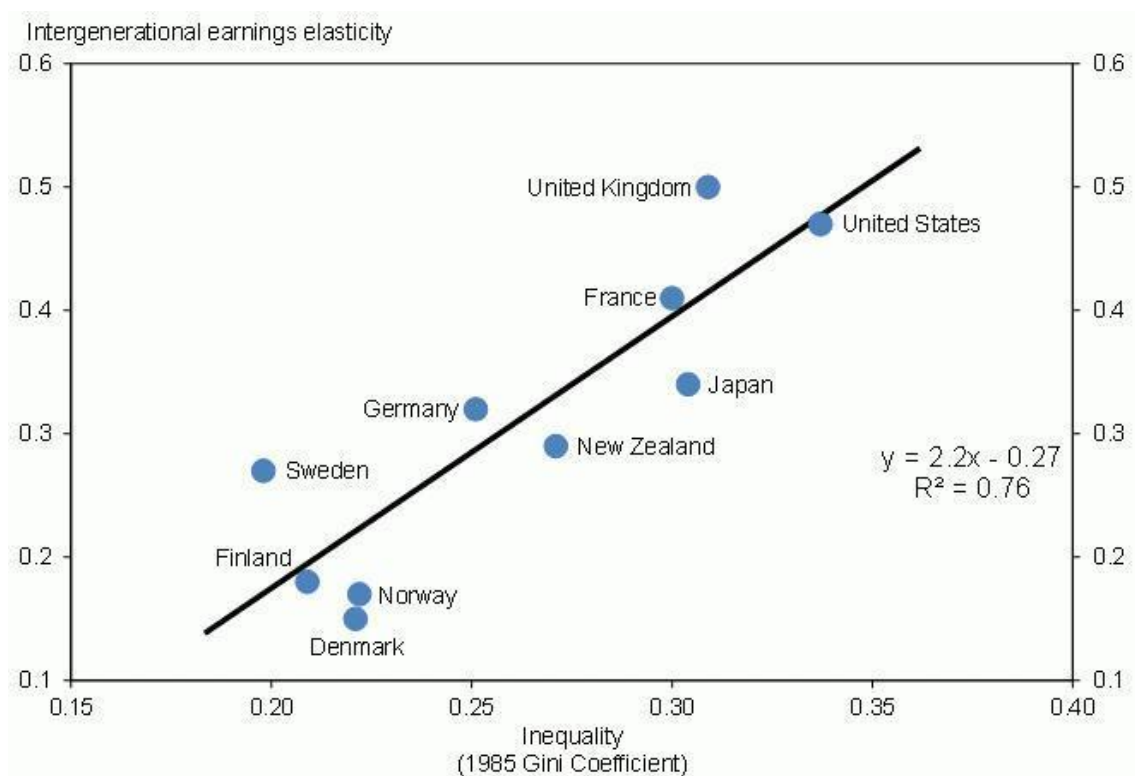


出典：『厚生労働省所得再分配調査結果平成 8 年、厚生労働省平成 26 年度所得再分配調査

報告書』より抜粋して筆者作成

このような格差が世代を通じて固定化されるとすれば、それは深刻な問題である。そこで、日本よりさらに格差が拡大している米国において、大統領経済諮問委員会委員長のアラン・クルーガーが公表した図表 1-2 のグレートギャツビー曲線を考える。これは、縦軸に世代間の所得弾力性を表し、横軸に所得の不平等度であるジニ係数を取り、OECD 諸国における格差拡大と世代間の格差の固定化の関係を示すグラフである。世代間の所得弾力性とは、親の所得が 1%上がると、子供の所得がいくら影響を受けるかという指標であり、親の所得に子どもが影響を受けやすいと弾力性が高いとされる。図表 1-2 は世界各国のデータによるグレートギャツビー曲線を示している。この曲線の形状を確認すると、所得の不平等度が大きい国ほど、世代間の所得弾力性が大きくなっている。つまり、格差が大きい社会であるとその格差が世代を通じて固定的であるということである。図における日本の位置を見てみると、グラフ右中央あたりに位置しているが、現在の格差拡大の傾向が続いていくと、米国のように格差が世代を通じて固定的になっていくことが懸念される。

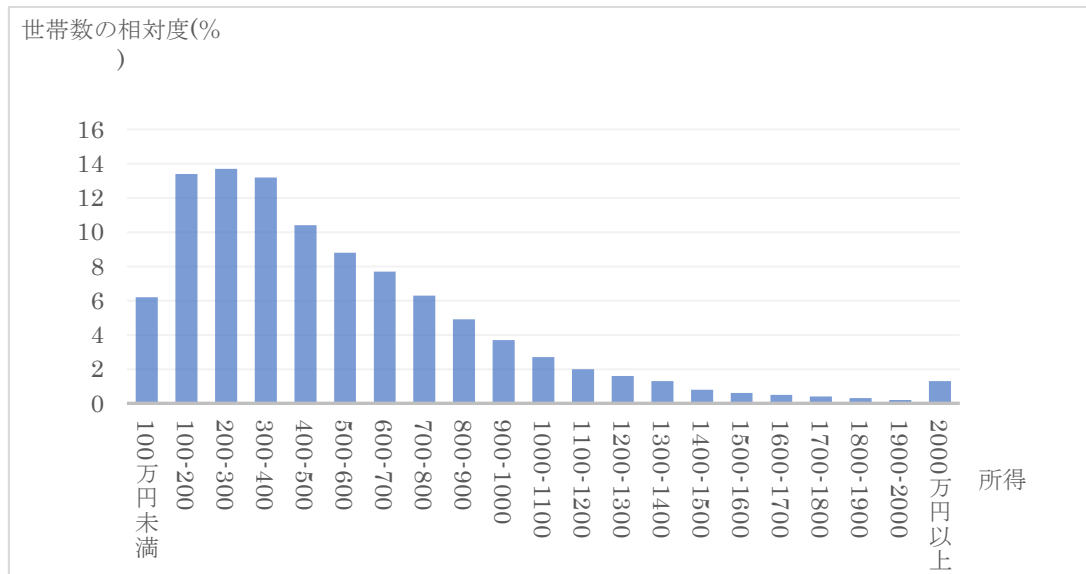
図表 1-2 グレートギャツビー曲線



出典：統計省統計局 統計 Today No. 53 より引用

図表 1-2 から、日本では現在、貧困層の拡大により、低所得の親が子どもへの教育投資を減少させており、そこで格差の再生産が起きていることがわかる。図表 1-3 のグラフでは、下位層の厚みが確認でき、日本全体において現在、所得における中流層が少ないことが示されている。厚生労働省の『平成 28 年度国民生活基礎調査』によると、平均所得金額は 545 万 8 千円であり、この所得を下回る割合は 61.4%にまで上る。

図表 1-3 所得金額階級別世帯数の相対度数分布

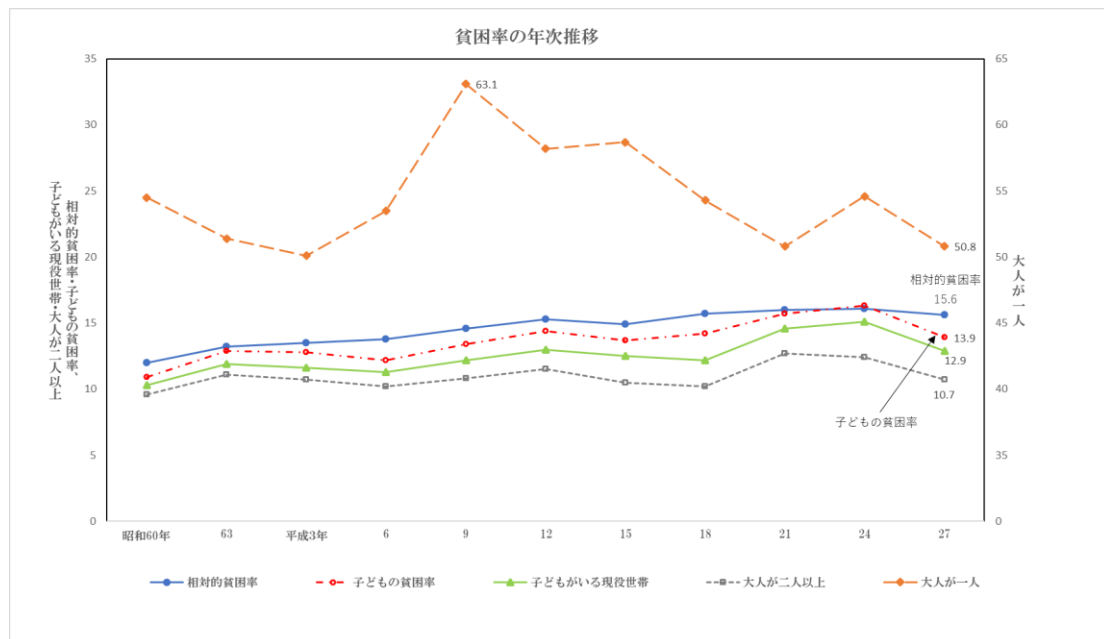


注：熊本県を除いたものである。

出典：厚生労働省平成 28 年国民生活基礎調査の概況より筆者作成

さらに、一般に貧困について議論する際に多く用いられる指標が相対的貧困率である。この相対的貧困率とは、所得の中央値の半分の境界線を下回る所得層の割合を示したものであり、この境界線を貧困線と呼ぶ。日本の相対的貧困率は、図表 1-4 から年々、上昇しており、また、子どものいる世帯や子どもの貧困率も併せて上昇傾向にあることがわかる。

図表 1-4 貧困率の推移



- 注：1) 平成6年の数値は、兵庫県を除いたものである。
 2) 平成27年の数値は、熊本県を除いたものである。
 3) 貧困率はOECDの作成基準に基づいて算出している。
 4) 大人とは18歳以上の者、子どもとは17歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が18歳以上65歳未満の世帯をいう。
 5) 等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

出典：『厚生労働省平成28年国民生活基礎調査の概況』より筆者作成

また、阿部(2016)は、格差の下半分に注目し、一番の貧困層の子どもたちが標準的な位置にいる子どもたちからどのくらい離れてしまっているのかを明らかにしている。そこでは、所得階層の下から10%目の子どもが属する世帯の所得とちょうど真ん中の世帯所得の子供たちを比べ、その差を中央値の割合として示した指標を「相対的所得ギャップ」と称して、計算している。その結果、日本の相対的所得ギャップは、60.21%であり、下位層10%に属する子どもの世帯所得は、真ん中に位置する子どもの世帯所得の4割にも満たないということが明らかになった。この結果は、先進国41か国の中でもワースト8位であり、年々増加の傾向を見せていることから、格差における下位層の深刻な貧困状況は見過ごせない問題だと言える。

図表 1-5 下位 10%目と中位(中央値)の等価世帯所得の推移 (万円)

	1985	1994	2003	2012
下位10%	90.25	114.6	100.24	84
中位(中央値)	177.23	234.19	218.16	211.12
相対的所得ギャップ	49.08	51.07	54.05	60.21

出典：厚生労働省『国民生活基礎調査』より阿部作成、より著者作成

つまり、日本の所得における下位層が厚くなっている現状や、相対的貧困率が世界的に見て高いことから日本は、所得格差問題に直面していると言える。特に、子育て世代の親や子供の貧困は著しく深刻であることがわかる。

第2項 教育格差の現状

前項により、日本では、世代間での格差の固定化が著しいということを示してきたが、この格差の固定化や連鎖は、主に子どもの教育格差を通じて発生している。日本では、義務教育や高校無償化など、金銭による制限がされないような学習制度が整えられているはずであるが、一体なぜ格差が生まれるのか。それは、塾や予備校、習い事などの学校外での教育費が大きな要因の一つであると我々は考えている。その理由としては、親の所得が高いほど学校外教育支出が増加し、その投資を受けた子供ほど学力が上がるということが考えられることである。

事実、川口(2011)は、JELS より、小学6年生の算数の学力テストの点数を従属変数とした重回帰分析の結果、受験塾、保護者学歴期待、学校外教育支出などが順に、学力に影響を与えていることを明らかにしている。つまり、所得の高い親から、高い学校外教育投資を受けた子どもほど、学力が向上すると言える。同時に、前項で示してきたような子どもを持つ世帯の貧困や、阿部(2016)の相対的所得ギャップの多さを考えると、所得の低い親の子どもは、学校外教育投資を受けられないために、低い学力を有している可能性が示唆されるだろう。

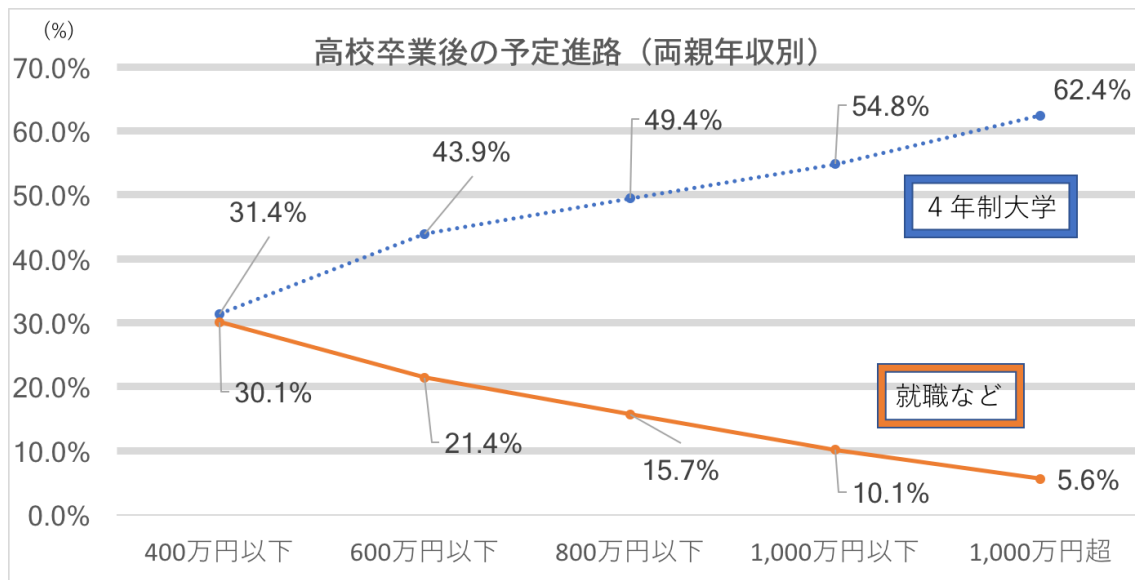
つまり、親の所得によって子どもたちは、受けられる教育投資量が定められ、結果的に自身の学歴や、後の年収に、親の格差が段階的に影響するというメカニズムがあると言える。よって、低所得層においては、貧困の世代間連鎖に直面しているのである。

当然、子どもの学力形成に関しては、IQ の遺伝など様々な要因が考察されるが、少なくとも、親からの学校外教育投資量は、子どもの教育格差における上位、下位の位置づけに影響を与える存在であるだろう。

第2節 格差の世代間連鎖の現状

それでは、前項で示した格差は子の世代へどのようなメカニズムで引き継がれているのだろうか。親の所得と子どもの進路の関係を示したものが図表 2-1 である。これを見ると、親の所得が高いほど子どもは四年制大学に進学する確率が高く、反対に親の所得が低いほど子どもは高校卒業後に就職する確率が高いことがわかる。

図表 2-1 親の収入と高校卒業後の進路

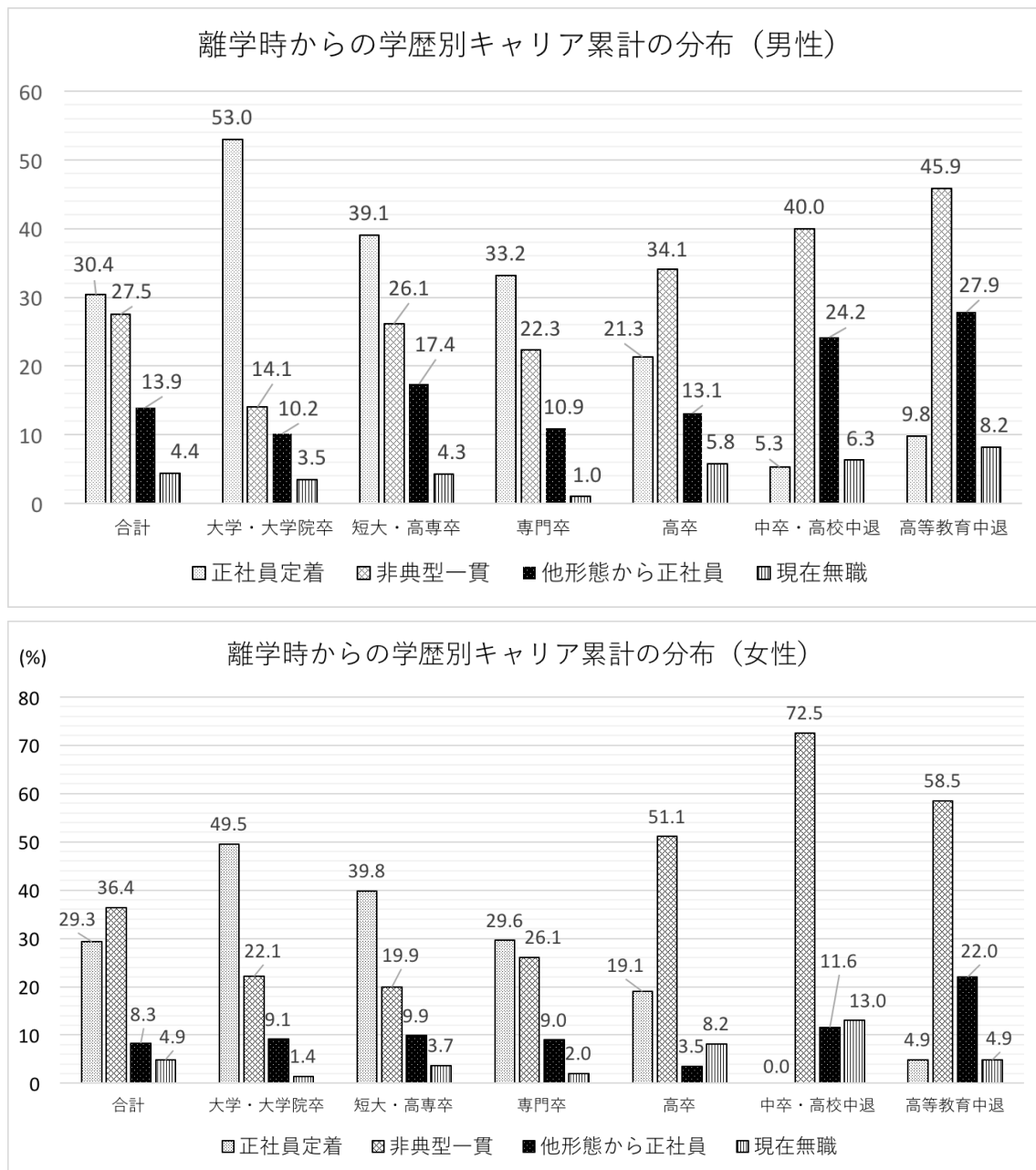


出典：文部科学省『平成 21 年度文部科学白書』第 1 章「家計負担の現状と教育投資の水準」より、筆者作成

次に、親の所得と正の関係がある子の学歴が、その子ども本人の就業状態に与える影響を示していく。図表 2-2 からは、四年制大学または大学院を卒業している者の正社員定着率が著しく高いと同時に、学歴が低いほど正社員定着率も低下していることがわかる。図中の非典型は非正規雇用を指している。正規雇用者と非正規雇用者の生涯所得にはさらに大きな差が生まれることが見てとれる。内閣府『平成 21 年度年次経済財政報告』によると、正規雇用者と非正規雇用者の生涯所得は、男性の場合、2.5 倍もの格差があるという。理由としては、非正規雇用者から正規雇用者への流動性の低さと、30 歳を過ぎると、OJT などの職業訓練の機会が限定され、人的資本の蓄積が乏しいことが挙げられている。

最終的な生涯賃金にはさらに大きな差が生まれることが見てとれる。だとすれば、これらのことから、親の所得が、子どもの最終学歴や就業状態を左右することが示唆される。また、安井・佐野(2009)でも、15 歳時点の生活水準が学歴もしくは収入と相関していることを示しており、家庭の経済的事実が子どもの将来に大きな影響を与えるとされる。

図表 2-2 就業状態の類型(性別・学歴別)



出典：文部科学省『平成 21 年度文部科学白書』第 1 章「家計負担の現状と教育投資の水準」より筆者作成

さらに、大学進学者に限定して比較した場合にも、親の所得を通じた格差が存在する。樋口(1992)は、親の所得が高いほど子が進学する大学の偏差値は高くなり、さらに偏差値の高い大学を卒業した学生ほど高い所得を得られる業種に就く確率が高いことを明らかにしている。また、渡辺(1987)や竹内(1989)らの社会教育学の研究では、偏差値の高い大学を卒業した学生ほど、大企業に就職できる確率が高いことも示されている。これらの研究から、親

の年収が子どもたちの最終学歴に影響を与え、生涯所得を左右しているということが明らかになった。だとすれば、家庭の金銭事情により、子どもたちは、自身の能力や才能を発揮する均等な機会を与えられていないと言える。

第3節 問題意識

前節での現状から日本では、所得における下位層が広がりを見せ、そこでの格差が、親から子へ様々な要因により連鎖していることがわかった。つまり、生まれた家庭が、子どもの学力格差や将来の所得格差における上位、下位という位置づけに多大な影響を及ぼす可能性が示唆される。特に、学力格差は、学歴格差を経由して所得格差を生み、子どもの将来の年収や生活レベルに多大な影響を及ぼす。また、従来、日本では子どもの学力や将来の年収に関して、親の所得や学歴が及ぼす影響について多くの研究がなされてきた。

しかし、今回我々は、家庭内での親の行動や習慣が子どもの学歴、またその後の年収に影響を与えているのではないかという仮説を立てた。子どもは、家庭内における親の行動や習慣から意識や価値観を無意識のうちに親と共有し、それを自分の将来に様々な形で反映させている可能性が考えられる。例えば、親が家事や仕事に取り組む姿を模範にして、子供は自身の勉強やスポーツ、課外活動などに取り組むかもしれない。だとするならば、家庭内での親の姿は、子供の様々な活動を通して、反映され、その後の学力や人的資本の形成に影響を及ぼす可能性が考えられる。

また、我々は、学力や意識もちろん、他にも、子どもの将来や人的資本の形成に影響を与える項目が存在するのではないかと考えている。それは、やる気や忍耐力、計画性などの非認知能力である。これは、社会人になってから企業の教育内で鍛えていくことも可能ではあるが、幼少期により一層獲得しやすいとされている。Cunha And Heckman(2007)は、非認知能力の獲得時期について8歳から9歳、10歳から11歳が最も大きいことを明らかにした。そのため、親の教育や家庭内での親の姿から子どもが無意識のうちに受け取る影響が大きく反映された能力だと考えられる。この非認知能力には、目の前のことを頑張りぬく力も含まれるため、勉学や仕事に精を出すためには欠かせない力であり、近年、年収に与える影響も研究されている。中室(2015)は、「非認知能力は、認知能力の形成にも一役買っているだけでなく、将来の年収、学歴や就業形態などの労働市場における成果にも大きく影響することが明らかになってきた」としている。そのため、我々は、親の行動、習慣などの家庭の在り方が子どもの将来の年収に、学力や非認知能力の形成を通して、どういった影響を与えるのかという、従来とは違った視点からアプローチをかけて研究していく。

また、我々が問題視している親子間の世代間連鎖は、当事者である親や子どもたちだけでなく社会全体にも影響を与える。中でもマイナスの影響は、子どもに能力を発揮させる場が均等ではないために、子どもの隠れた才能の芽を摘んでいるという点が挙げられる。このように、親の金銭的事情や価値観により、本来発揮されていたかもしれない才能が埋もれてし

まうことは、将来的には社会全体の生産性を低下させることにも繋がりがねないだろう。だとすれば、解決すべき問題として目を向けていく必要があるが、日本の苦しい財政状況の中で、教育投資などのアプローチをこれ以上増やすことは困難である。

そこで、我々は、親から子へのアクションとして、数多く研究されてきた教育投資額以外にも、子どもの学力、あるいはやる気や勉学における価値の大きさに影響を与えている要因が存在するのであれば、現代日本での、子どもの将来の所得格差、並びに格差の世代間連鎖の是正が可能かもしれないと感じ、家庭内の在り方に問題意識を向けている。

以上のことから我々は、未来ある子どもたちが、生まれた家庭の金銭的事情により、進路やその先の将来の選択肢が制限されない社会を目指していく。

第2章 先行研究及び本稿の位置づけ

第1節 先行研究

近年所得格差が拡大し、また、世代間で固定化されつつあるという現状を考えるにあたり、幼少期の子どもたちが圧倒的に長い時間を共にしている親の行動やしつけが子どもの所得に与える影響は大きいのではなかという可能性に我々は着目した。親の所得や学歴、子どもへの教育投資額が子どもの所得に与える影響についての研究は蓄積があるが、親が子どもに対して行うしつけと子どもの所得の関係を明らかにした日本における研究はほとんどない。そこで本章では、主に親が子どもに対して行うしつけや、子ども時代の家庭環境と子どもの所得の関係について注目し、2つの先行研究を挙げた上で、本研究の位置づけを示す。

第1項 幼児期のしつけと成人後の労働所得の関係

西村ほか(2014)は、親が子どもに対して行うしつけが子どもの所得に与える影響を推定した唯一の論文である。子ども時代になされたしつけが、その個人の成人後の労働所得に与える影響を調べることにより、しつけが労働市場における評価にどのような影響を与えているかを検証している。子ども時代に受けたしつけによって、学歴形成がどのような影響を受けたか分析し、しつけが労働市場の評価にどのような影響を与えているかを調べている。その結果、「4つの基本的なモラル」(「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「勉強をする」)のしつけを全て受けた者は、どれも受けていない者に比べて、大卒及び大学院卒が多く、約64万円多く所得を得ていることを統計的に確認している。また、しつけの倫理観および価値判断に与える影響が分析されており、社会性の高い価値判断をする傾向にあることも示されている。

第2項 幼児期の家庭環境や非認知能力と学歴、雇用形態、賃金の関係

戸田ほか(2014)では、幼少期の家庭環境や非認知能力が、学歴、雇用形態、賃金といった労働市場における成果にどのような影響を与えているかを検証している。非認知能力とは忍耐力や勤勉性などのことであり、IQに代表される認知能力と同様に、人的資本の1つである。戸田ほか(2014)では、①認知能力(15歳の成績)について、学歴、雇用形態、賃金に対

して有意な影響を示しており、非認知能力や幼少期の家庭環境をコントロールしてもなお有意であること、②蔵書が多いことや暮らし向きが良い家庭で育った人ほど大卒以上を卒業する傾向にあり、就業以降は家庭環境の影響が弱まるが、賃金に対しては蔵書の多い家庭で育った人ほど賃金が高くなること、③非認知能力について、勤勉性を表す高校時の無遅刻は、学歴、初職の雇用形態、現職の雇用形態で正の影響を与え、内向性を示す変数は、学歴には正の影響を与えるが、現職の雇用形態に負の影響を与えることを明らかにした。

第2節 本稿の位置づけ

上記で示した先行研究では、注意すべきことが2点ある。

1つ目は、西村ほか(2014)で、分析において親の所得や学歴、子どもの頃の生活水準がコントロールされていないという点である。ここでのしつけの効果は、親の年収の効果を見ているにすぎないという可能性がある。よって、子どもの所得の決定要因を検証する上で必要な条件であると考えられる。

2つ目は、西村ほか(2014)と戸田ほか(2014)ともに、親の無意識のうちに行っている習慣や行動については着目されていないという点である。子どもは親と過ごす時間が長いので、親が無意識のうちに行っている習慣や行動を日常的によく見ている。そのため、それらを自分の行動や価値観に反映させたり、自己の人的資本の形成に影響を受けることで、子ども自らの将来の所得に影響している可能性がある。

よって先行研究を踏まえた本稿の新規性として、①我々は、子どもの将来の所得と幼少期の親の習慣や行動の関係について、親の所得や学歴、子どもの頃の生活水準をコントロールして実証分析を行うこと、②子どもの将来所得について親の無意識な習慣や行動に着目した実証分析を行うこと、また本稿では、③子どもを男女に分けた場合のしつけの効果の実証分析についても行う。③を行う意図については、日本では子どもの性別で親の子どもへの将来の期待が異なることで、教育やしつけが熱心度や異なると考えられるため、親のしつけの効果について男女別に検証する。

次章より、これらの親の習慣や行動について焦点を当てた分析を行う。その結果を踏まえた上で、すでに膨大な財政赤字を抱える日本において、大きな財政出動をすることなく格差是正を行う策や、現在検討されている教育の無償化の効果をより一層高める策が検討できるという点で、本稿が貢献する役割は大きいと考える。

第3章 実証分析

第1節 使用データ

第1項 本稿に用いるデータ

本稿における分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「若者の仕事生活実態調査(インターネット調査)2006」(ベネッセ教育総合研究所)の個票データの提供を受けた。これらのデータは、若者の仕事と生活の様子、ならびに子ども時代の体験や親子関係を明らかにすることを目的に2006年1月から7月にかけて行われた調査である。調査方法はインターネット調査であり調査対象は学生を除く25～35歳の男女である。また、サンプルサイズは男性1,250名、女性1,250名の計2,500名である。このデータを用いた根拠として、「子どもの時代の親の様子、重視していたしつけ」が質問項目に含まれており、「親の習慣や行動が子どもの年収に与える影響」の推計に必要な変数項目が備わっていることが挙げられる。

なお、分析では推計に必要な項目が揃っており、欠損の見られなかった1,921名を対象とする。性別では男性が1,182名、女性が739名と男性がやや多くなっている。

第2項 変数紹介

【被説明変数】

現在の年収

被説明変数として回答者の現在の年収を置いた。これは、「現在の年収(税込)は、次のうちどれにあたりますか?」という質問に対して「1=100万円未満」、「2=100万円以上～200万円未満」、「3=200万円以上～300万円未満」、「4=300万円以上～400万円未満」、「5=400万円以上～500万円未満」、「6=500万円以上～600万円未満」、「7=600万円以上～700万円未満」、「8=700万円以上～800万円未満」、「9=800万円以上～900万円未満」、「10=900万円以上～1000万円未満」、「11=1000万円以上～1200万円未満」、「12=1200万円以上～1400万円未満」、「13=1400万円以上」のいずれかに回答してもらったものである。

分析の効果をより具体的に示すために、2～12の選択肢に対しては最小の値と最大の値の中央値を採用した。また、1の回答に対しては100万円の75%をとった75万円、13の回答に対しては1400万円の125%をとった1750万円という数値を採用した。

学歴ダミー

「これまでに卒業された学校(大学)は次のうちどれですか」という質問に対して「a=国立」、「b=公立」、「c=私立」、「d=その他」、「e=通ってない」という回答項目がある。

被説明変数に用いる学歴ダミーは「通っていない」が0、「a=国立」、「b=公立」、「c=私立」、「d=その他」のいずれかを選んだ場合を1とする「学歴(大卒ダミー)」というダミー変数を作成した。

【説明変数】

子ども時代の親の様子

回答者は、小・中学生のころをふりかえって、「あなたのお父さんやお母さんの様子についてどのようなことが当てはまりますか?」という質問について「1=とてもそう」、「2=まあそうである」、「3=あまりそうではない」、「4=そうではない」と回答する。

一般的に、アンケート回答者は、そのような様子だった印象が強い場合に「1=とてもそう」を選ぶと考えられる。我々は、親がよくしてしまう習慣や行動に注目して分析したいため、ダミー変数は「1=とてもそう」を選んだ場合を1、それ以外を選んだ場合は0とするダミー変数に変更した。以下は我々が作成したダミー変数の名前である。

「読書をしていた(漫画や雑誌は除く)」は「読書ダミー」とする。

「家の中が綺麗に整理されていた」は「整理ダミー」とする。

「手作りの料理を出してくれた」は「手作り料理ダミー」とする。

「誇りを持って仕事をしていた」は「仕事に誇りダミー」とする。

「楽しそうに生活していた」は「楽しそうに生活ダミー」とする。

「人づきあいを大切にしていた」は「人づきあいダミー」とする。

「子どもの教育に熱心だった」は「教育熱心ダミー」とする。

「しつけが厳しかった」は「しつけ厳しいダミー」とする。

「家族の仲がよかった」は「家族の仲がよいダミー」とする。

子ども時代に親が重視していたしつけ

回答者は、小・中学生のころをふりかえって、「あなたのお父さんやお母さんは、あなたを育てる上で次のようなことをどのくらい重視していたと思いますか?」という質問について「1=とても重視していた」、「2=まあ重視していた」、「3=あまり重視していなかった」、「4=全然重視していなかった」と回答する。

一般的に、アンケート回答者は、そのしつけを受けていた印象が強い場合に「1=とても重視していた」を選ぶと考えられる。我々は、親が強く行っていたしつけに注目して分析したいため、「1=とても重視していた」を選んだ場合を1、それ以外を選んだ場合は0とする

るダミー変数を作成した。以下は我々が作成したダミー変数の名前である。

「規則正しく生活すること」は「規則正しくダミー」とする。

「礼儀やマナーをわきまえること」は「礼儀マナーダミー」とする。

「嫌なことでも我慢してやること」は「我慢ダミー」とする。

「自分でできることは自分でやること」は「自分でできることはやるダミー」とする。

「家事を手伝うこと」は「家事手伝うダミー」とする。

「友達を大切にすること」は「友達を大切ダミー」とする。

「いい学校に入れるように勉強すること」は「勉強するダミー」とする。

「先生の言うことをしっかり聞くこと」は「先生の言うことを聞くダミー」とする。

「お金の無駄遣いをしないこと」は「無駄遣いしないダミー」とする。

「好き嫌いせず何でも食べること」は「好き嫌いしないダミー」とする。

「自分のやりたいことを大切にすること」は「自分のやりたいことをやるダミー」とする。

「人に迷惑をかけないようにすること」は「迷惑をかけないダミー」とする。

小・中学生のころの家庭の経済的な暮らし向き

回答者は、小・中学生のころをふりかえって、「あなたの家庭の経済的な暮らし向きはどうでしたか？」という質問に対し「1=ゆとりがあった」、「2=どちらかといえばゆとりがあった」、「3=ふつう」、「4=どちらかといえば苦しかった」、「5=苦しかった」、「6=わからない」と回答する。

我々は、「3=ふつう」が0、「1=ゆとりがあった」、「2=どちらかといえばゆとりがあった」、「4=どちらかといえば苦しかった」、「5=苦しかった」、「6=わからない」のそれぞれを1とする、「家計ゆとりダミー」、「家計ややゆとりダミー」、「家計やや苦しかったダミー」、「家計苦しかったダミー」、「家計わからないダミー」の5つのダミーを作成した。

お父さんは大学や短期大学を卒業しているか

回答者は「あなたのお父さんは大学や短期大学を卒業されていらっしゃいますか。」という質問に対し、「1=卒業している」、「2=卒業していない」、「3=わからない」で回答する。

我々は、「2=卒業していない」が0、「1=卒業している」、「3=わからない」のそれぞれが1をとるダミー変数、「父親大卒ダミー」、「父親大卒わからないダミー」という2つのダミー変数を作成した。

お母さんは大学や短期大学を卒業しているか

回答者は「あなたのお母さんは大学や短期大学を卒業されていらっしゃいますか。」とい

う質問に対し、「1=卒業している」、「2=卒業していない」、「3=わからない」で回答する。

我々は、「2=卒業していない」が0、「1=卒業している」、「3=わからない」のそれぞれが1をとるダミー変数、「母親大卒ダミー」、「母親大卒わからないダミー」という2つのダミー変数を作成した。

性別

女性なら0、男性なら1をとる男性ダミーを作成した。

年齢

この変数は回答者に自分の年齢について回答してもらった値をそのまま用いる。

卒業した学校の設置者：大学

「あなたがこれまでに卒業された学校(大学)は次のうちどれですか。」という質問に対して、「a=国立」、「b=公立」、「c=私立」、「d=その他」、「e=通ってない」という回答項目がある。

ダミー変数は「e=通っていない」が0、「a=国立」、「b=公立」、「c=私立」、「d=その他」のそれぞれが1をとる「国立大卒ダミー」、「公立大卒ダミー」、「私立大卒ダミー」、「その他大卒ダミー」の4つのダミーを作成した。

今回使用するデータの基本統計量は以下の通りである。

表 3-1 基本統計量

変数名	サンプルサイズ	平均	標準偏差	最小値	最大値
年収	1,921	3,690,916	2,187,446	750,000	17,500,000
学歴（大卒ダミー）	2,500	0.4716	0.499293	0	1
読書ダミー	2,500	0.12	0.325027	0	1
整理ダミー	2,500	0.2208	0.414869	0	1
しつけ厳しいダミー	2,500	0.2476	0.431705	0	1
仕事に誇りダミー	2,500	0.3488	0.476686	0	1
楽しそうに生活ダミー	2,500	0.2288	0.420144	0	1
人づきあいダミー	2,500	0.3236	0.467943	0	1
教育熱心ダミー	2,500	0.1624	0.368891	0	1
手作り料理ダミー	2,500	0.6508	0.476813	0	1
家族の仲がよいダミー	2,500	0.2836	0.450835	0	1
規則正しくダミー	2,500	0.2536	0.435158	0	1
礼儀マナーダミー	2,500	0.4012	0.490239	0	1
我慢ダミー	2,500	0.1792	0.383596	0	1
自分でできることはやるダミー	2,500	0.2792	0.448696	0	1
家事手伝うダミー	2,500	0.194	0.395508	0	1
友達を大切ダミー	2,500	0.178	0.382589	0	1
勉強するダミー	2,500	0.1116	0.314937	0	1
先生の言うことを聞くダミー	2,500	0.1408	0.347885	0	1
無駄遣いしないダミー	2,500	0.2364	0.424956	0	1
好き嫌いしないダミー	2,500	0.2436	0.42934	0	1
自分のやりたいことをやるダミー	2,500	0.1564	0.363307	0	1
迷惑をかけないダミー	2,500	0.4116	0.492222	0	1
家計ゆとりダミー	2,500	0.092	0.289084	0	1
家計ややゆとりダミー	2,500	0.22	0.414329	0	1
家計やや苦しかったダミー	2,500	0.1684	0.374296	0	1
家計苦しかったダミー	2,500	0.076	0.265051	0	1
家計わからないダミー	2,500	0.0072	0.084564	0	1
父親大卒ダミー	2,500	0.2804	0.449285	0	1
父親大卒わからないダミー	2,500	0.0504	0.218813	0	1
母親大卒ダミー	2,500	0.1892	0.391746	0	1
母親大卒わからないダミー	2,500	0.062	0.241204	0	1
男性ダミー	2,500	0.5	0.5001	0	1
年齢	2,500	30.9284	2.879477	25	35
国立大卒ダミー	2,500	0.1296	0.33593	0	1
公立大卒ダミー	2,500	0.0224	0.14801	0	1
私立大卒ダミー	2,500	0.3108	0.462914	0	1
その他大卒ダミー	2,500	0.0088	0.093413	0	1

第2節 親の習慣、行動と子どもの将来年収の関係

第1項 検証仮説および推定式

前章で述べられているとおり、本稿では年収の決定要因として、親の習慣や行動がどれだけ影響を与えているのかについて分析する。ひとくちに影響を与えているといっても、それらが子どもの学力以外の能力に影響を与え、それが子どもの労働生産性に働きかけて、年収に影響を及ぼしているのか、それとも子どもの学力に影響を与え、学歴を通じて年収に影響を及ぼしているのか、影響の及ぼし方は2通り考えられる。我々は、どちらのルートが子どもの年収に、より大きい影響を与えているのかを解明するために、学歴を統制した場合と、統制しない場合で、二段階に分けて分析を行った。

仮説1: 親の習慣、行動は、子どもの学力以外の能力を引き上げることを通じて、労働生産性を高め、年収を増加させる。

親の習慣、行動(以下、親の様子、しつけ)は子どもの非認知能力などに正の影響を与え、それは学歴による年収の上昇とは別に、子どもの将来の仕事の選択や、働き方などを通じて、年収を増加させることが期待される。ただし、親が子どもの仕事の選択や、働き方などにそれほど干渉しないしつけと捉えられる「自分のやりたいことを大切にする」といった項目には注目すべきだろう。このようなしつけを受けた子どもは、より多くの年収が得られる仕事があったとしても、自分のやりたいことを優先させて、その仕事を選択しない可能性がある。このような項目は、子どもの年収を引き下げてしまう、もしくは何も影響しないというの也被えられる。

仮説2: 親の習慣、行動は子どもの学力を向上させ、学歴を通じて、年収を増加させる。

人的資本理論から考えても、学歴というのは年収の大きな決定要因だと考えられる。親の習慣、行動は、子どもに勉強をさせたり、勉強が続くように忍耐力を養うようにしたりする影響を与えることにより、学歴を引き上げる効果がある可能性がある。そして、その結果、年収が引き上げられるかもしれない。ただし、「しつけが厳しかった」といった項目は、子どもが反抗し、勉強をしなくなることを助長する項目だという可能性も考えられるため、学歴を通じた年収に負の影響を与えるかもしれない。また、親が学歴をそれほど重視しない様子と捉えられる「自分のやりたいことを大切にする」といった項目にも注目すべきだろう。

勉強以外のことを子どもに積極的にやらせることというのは、たとえ勉強ができて進んで大学進学しない可能性があるため、学歴を通した子どもの将来年収には負の影響、もしくは影響がないというの也被えられる

仮説 1, 2 のどちらの検証においても、親の属性として、家庭の経済的な状況や父親母親の学歴(大学、短期大学を卒業しているか)を統制する。これらを統制することにより、家庭の経済的な状況や、親の学歴を一定にしたときの親の様子やしつけの効果を推定することができる。また年収に直接的に影響がある回答者の属性として、性別、年齢についても統制する。

仮説 1(親の習慣、行動は、子どもの学力以外の能力を引き上げることを通じて、労働生産性を高め、年収を増加させる)の推定式は以下の通りである。

Y (回答者の現在の年収)

$$= \alpha + \beta' \text{ 親の様子} + \gamma' \text{ 親が重視していたしつけ} + \delta' \text{ 親の属性} \\ + \varepsilon' \text{ 回答者の属性} + \zeta' \text{ 各大卒ダミー} + u$$

α : 定数項 u : 誤差項

親の様子 :

親の様子についての項目の「読書ダミー」、「整理ダミー」、「手作り料理ダミー」、「仕事に誇りダミー」、「楽しそうに生活ダミー」、「人づきあいダミー」、「教育熱心ダミー」、「厳しいダミー」、「家族の仲がいいダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親が重視していたしつけ :

親が重視していたしつけについての項目の「規則正しくダミー」、「礼儀マナーダミー」、「我慢ダミー」、「自分でできることはやるダミー」、「家事手伝うダミー」、「友達を大切にするダミー」、「勉強するダミー」、「先生の言うことを聞くダミー」、「無駄遣いしないダミー」、「好き嫌いしないダミー」、「自分のやりたいことをやるダミー」、「迷惑をかけないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親の属性 :

親の属性としての項目の、家庭の経済的な状況「家計ゆとりダミー」、「家計ややゆとりダミー」、「家計やや苦しかったダミー」、「家計苦しかったダミー」、「家計わからないダミー」、父親母親の学歴(大学、短期大学を卒業しているか)「父親大卒ダミー」、「父親

大卒わからないダミー」、「母親大卒ダミー」、「母親大卒わからないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

回答者の属性：

回答者の属性としての項目の、「男性ダミー」、「年齢」のそれぞれのベクトルを表す。

各大卒ダミー：

「国立大卒ダミー」、「公立大卒ダミー」、「私立大卒ダミー」、「その他大卒ダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

仮説 2(親の習慣、行動は子どもの学力を向上させ、学歴を通じて、年収を増加させる)の推定式は、仮説 1 の推定式の説明変数から「各大卒ダミー」を取り除いたものである。推定式は以下の通りである。

Y (回答者の現在の年収)

$$= \alpha + \beta' \text{ 親の様子} + \gamma' \text{ 親が重視していたしつけ} + \delta' \text{ 親の属性} \\ + \varepsilon' \text{ 回答者の属性} + u$$

α : 定数項 u : 誤差項

親の様子 :

親の様子についての項目の「読書ダミー」、「整理ダミー」、「手作り料理ダミー」、「仕事に誇りダミー」、「楽しそうに生活ダミー」、「人づきあいダミー」、「教育熱心ダミー」、「厳しいダミー」、「家族の仲がいいダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親が重視していたしつけ :

親が重視していたしつけについての項目の「規則正しくダミー」、「礼儀マナーダミー」、「我慢ダミー」、「自分でできることはやるダミー」、「家事手伝うダミー」、「友達を大切に作るダミー」、「勉強するダミー」、「先生の言うことを聞くダミー」、「無駄遣いしないダミー」、「好き嫌いしないダミー」、「自分のやりたいことをやるダミー」、「迷惑をかけないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親の属性 :

親の属性としての項目の、家庭の経済的な状況「家計ゆとりダミー」、「家計ややゆとりダミー」、「家計やや苦しかったダミー」、「家計苦しかったダミー」、「家計わからないダミー」、父親母親の学歴(大学、短期大学を卒業しているか)「父親大卒ダミー」、「父親大卒わからないダミー」、「母親大卒ダミー」、「母親大卒わからないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

回答者の属性 :

回答者の属性としての項目の、「男性ダミー」、「年齢」のそれぞれのベクトルを表す。

第2項 分析結果および結果の解釈

表 3-2 子どもの年収の決定要因に関する分析

被説明変数	年収(大卒ダミーあり)			年収(大卒ダミーなし)		
	係数	有意水準	標準誤差	係数	有意水準	標準誤差
読書ダミー	-11.7916		152250	-122020		154703
整理ダミー	59737.3		120983	64698.1		122882
しつけ厳しいダミー	-234358	*	127646	-243061	*	129686
仕事に誇りダミー	-267877	**	122828	-325240	***	124482
楽しそうに生活ダミー	120067		147416	160638		149700
人づきあいダミー	122711		120878	89819.2		122784
教育熱心ダミー	258689	*	150324	314137	**	152551
手作り料理ダミー	22540.4		106850	42068.5		108521
家族の仲がよいダミー	-149600		125886	-127505		127922
規則正しくダミー	130303		132829	157769		134847
礼儀マナーダミー	-38139.4		128409	-39190.9		130352
我慢ダミー	100242		150974	79060.4		153262
自分でできることはやるダミー	207780		138347	177043		140545
家事手伝うダミー	-107828		142399	-136738		144476
友達を大切ダミー	-8997.65		145070	-2577.51		147337
勉強するダミー	-63490.3		163102	56190.5		154757
先生の言うことを聞くダミー	-169483		159479	-201387		161601
無駄遣いしないダミー	-13896.8		126584	34142.8		128456
好き嫌いしないダミー	57816.7		124727	80591.6		126598
自分のやりたいことをやるダミー	172198		141676	179952		143992
迷惑をかけないダミー	-40208.9		117645	-55344.5		119544
家計ゆとりダミー	426196	**	169756	379771	**	172392
家計ややゆとりダミー	149827		117266	150082		119162
家計やや苦しかったダミー	35477.7		130702	5585.37		132721
家計苦しかったダミー	-95216		178763	-236056		180762
家計わからないダミー	55521.1		525698	-19117.7		533983
父親大卒ダミー	261404	**	119538	329331	***	120356
父親大卒わからないダミー	-142938		322273	-53955.5		326970
母親大卒ダミー	161694		134042	268636	**	135550
母親大卒わからないダミー	18536.2		294408	-71208		298664
男性ダミー	1618520	***	95002.3	1755679	***	94747.3
年齢	121543	***	15701.5	113710	***	15925.6
国立大卒ダミー	987986	***	138263			
公立大卒ダミー	1026589	***	294198			
私立大卒ダミー	500819	***	104770			
その他大卒ダミー	-691020		441563			
定数項	-1579717	***	501951	-1119063	**	506724

注：***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 3-2 は親の様子、しつけが子どもの年収に及ぼす影響の推定結果を示している。学歴を統制した場合、子どもの年収に対して、「しつけ厳しいダミー」、「仕事に誇りダミー」が負に有意、「教育熱心ダミー」が正に有意であった。それぞれの係数から、しつけの厳しい親の子どもは将来年収が 234,358 円低くなること、仕事に誇りを持っている親の子どもは将来年収が約 267,877 円低くなること、教育に熱心な親の子どもは将来年収が 258,689 円高くなることがわかった。

学歴を統制しない場合、前述と同様に、「しつけ厳しいダミー」、「仕事に誇りダミー」が負に有意、「教育熱心ダミー」が正に有意であった。それぞれの項目の係数から、しつけの厳しい親の子どもは将来年収が約 243,061 円低くなり、仕事に誇りを持っている親の子どもは将来年収が約 325,240 円低くなり、教育に熱心な親の子どもは将来年収が約 314,337 円高くなることがわかった。

注目している変数以外の影響は、以下の通りである。大卒を統制した場合、子どもの年収に対して、「男性ダミー」、「年齢」、「家計ゆとりダミー」、「父親大卒ダミー」、「国立大卒ダミー」、「公立大卒ダミー」、「私立大卒ダミー」が正に有意であった。それぞれの係数から、男性は女性よりも年収が 1,618,520 円高くなり、年齢が 1 歳(25 歳から 35 歳の間で)上がると、年収が約 121,543 円高くなり、家計にゆとりのある家で育つと家計が平均的な家よりも将来年収が約 426,196 円高くなり、父親が大卒の子どもは、父親が大卒ではない子どもよりも将来年収が約 261,404 円高くなり、自身が国立大学を卒業していると大学を卒業していない人よりも年収が 987,986 円高くなり、自身が公立大学を卒業していると大学を卒業していない人よりも年収が 1,026,589 円高くなり、自身が私立大学を卒業していると大学を卒業していない人よりも年収が 500,819 円高くなることをわかった。

大卒を統制しない場合、子どもの年収に対して、「男性ダミー」、「年齢」、「家計ゆとりダミー」、「父親大卒ダミー」、「母親大卒ダミー」が正に有意であった。それぞれの係数から、男性は女性よりも年収が 1,755,679 円高くなり、年齢が 1 歳(25 歳から 35 歳の間で)上がると、年収が約 113,710 円高くなり、家計にゆとりのある家で育つと家計が平均的な家よりも将来年収が約 379,771 円高くなり、父親が大卒の子どもは、父親が大卒ではない子どもよりも将来年収が約 329,331 円高くなり、母親が大卒の子どもは、母親が大卒ではない子どもよりも将来年収が 268,636 円高くなることをわかった。

上記の結果で有意となった親の様子やしつけの項目について、それぞれの項目が、家庭の経済的状況や親の学歴を統制したうえで有意であったことを考慮し、結果の解釈をしている。

学歴を統制するということは、年収に影響を与え、かつ親の様子やしつけとも相関する学歴を説明変数に加えることで、学歴を一定とした状態を作り出し、そのうえで、どれだけ親の様子やしつけが年収に影響を与えているかを推定していると解釈できる。

学歴を統制しても「教育熱心ダミー」が正に有意であるということから、教育に熱心であるということが、子どもの学力、それに非認知能力や、その他子どもの能力全般に正の影響を与え、それが子どもの労働生産性を高め、年収を増加させていると考えられる。また、「しつけ厳しいダミー」が負に有意であるということから、親のしつけの厳しさが、子どもの自主性などに負の影響を与え、それが労働生産性を押し下げ、年収を引き下げていると考えられる。「仕事に誇りダミー」が負に有意であるが、これは仕事に対して親が過剰に自信を持ってしまうことにより、子どもにその価値観を押し付けていて、それが子どもの働き方に影響を与え、年収に負の影響を与えているのではないかと考えられる。

学歴を統制しない場合では、統制した場合と同じ項目が有意であった。また、学歴を統制した場合よりも、それぞれの変数が強い影響を示す係数であった。これは、親の様子やしつけが年収に与える影響について、学歴を一定にしたときの影響よりも学歴を通じた影響の方が大きいということを意味する。このそれぞれの増加分(もしくは減少分)は学歴の変化を通すことにより新たに生まれた年収への影響だと考えられる。

「しつけ厳しいダミー」が負に有意であるというのは、親のしつけが厳しく、子どもの勉強に対するやる気をそぎ落としてしまっていて、それが学歴を低くし、年収を引き下げている可能性がある。「仕事に誇りダミー」が負に有意であるというのは、前述のように、親の過剰な自信によって、子どもの勉強に関する教育がおろそかになってしまっている可能性がある。「教育熱心ダミー」が正に有意であるのは、親が教育に熱心なため、家庭内の教育に力を入れていて、学歴を押し上げ、それが年収を上昇させていると考えられる。

全体の傾向として、子どもの将来の年収に影響を及ぼすのは、「しつけが厳しい」、「仕事に誇りを持っている」、「教育に熱心である」という3つの項目であることがわかった。また、学歴を統制しない場合に、親の様子、しつけがより強く年収に影響を与えているのは、親の様子、しつけの影響で学歴が変化したことによって、追加的に子どもの年収に影響を与えている部分があるということを意味する。

第3節 親の習慣、行動と子どもの最終学歴の関係

第1項 検証仮説および推定式

前節の検証結果により、親の習慣、行動は学歴を統制しないほうが、子どもの将来年収に影響を与えるということがわかった。このことから、学歴が変化したことによって、追加的に子どもの年収に影響を与えている部分があるということがわかった。前節では年収を被説明変数においての分析であったため、学歴と親の様子、しつけの関係が間接的にしか推定できなかった。本節では、子どもの学歴を被説明変数において、実証分析し、学歴の決定要因には親の様子、しつけがどこまで関わってくるのか、解明していく。

仮説3：子どもの学歴に影響を与える親の習慣、行動が存在する。

具体的な親の様子、しつけとして「子どもの教育に熱心だった」、「いい学校に入れるように勉強すること」という項目がある。これらは子どもの認知能力を向上させるための習慣、行動と考えられ、学歴に正の影響を与えると考える。また先行研究にもあったように、その他の項目で子どもの非認知能力に正の影響を与えるものは、認知能力にも、そして学歴にも正の影響を与える可能性がある。

仮説3の場合も、親の属性として、家庭の経済的な状況や父親母親の学歴(大学、短期大学を卒業しているか)を統制する。これらを統制することにより、家庭の経済的状況や、親の学歴を一定にしたときの親の様子やしつけの効果を推定することができる。また、回答者の属性については、大学に入ること自体は年収ほど男女間の差が生まれないと考えられるのと、現在の年齢は大学を卒業したかしないかにほとんど影響しないと考えられるため、統制しなかった。

仮説3(子どもの学歴に影響を与える親の習慣、行動が存在する。)の推定式は、これまでの分析と同じく、親の様子、しつけに関する項目と、親の属性に関する項目がすべて説明変数に組み込まれている。これまでの分析の推定式と異なるのは、回答者の属性が含まれていないということである。

Y (回答者の学歴(大卒ダミー))

$$= \alpha + \beta' \text{ 親の様子} + \gamma' \text{ 親が重視していたしつけ} + \delta' \text{ 親の属性} + u$$

α : 定数項 u : 誤差項

親の様子：

親の様子についての項目の「読書ダミー」、「整理ダミー」、「手作り料理ダミー」、「仕事に誇りダミー」、「楽しそうに生活ダミー」、「人づきあいダミー」、「教育熱心ダミー」、「厳しいダミー」、「家族の仲がいいダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親が重視していたしつけ：

親が重視していたしつけについての項目の「規則正しくダミー」、「礼儀マナーダミー」、「我慢ダミー」、「自分でできることはやるダミー」、「家事手伝うダミー」、「友達を大切にするダミー」、「勉強するダミー」、「先生の言うことを聞くダミー」、「無駄遣いしないダミー」、「好き嫌いしないダミー」、「自分のやりたいことをやるダミー」、「迷惑をかけないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

親の属性：

親の属性としての項目の、家庭の経済的な状況「家計ゆとりダミー」、「家計ややゆとりダミー」、「家計やや苦しかったダミー」、「家計苦しかったダミー」、「家計わからないダミー」、父親母親の学歴(大学、短期大学を卒業しているか)「父親大卒ダミー」、「父親大卒わからないダミー」、「母親大卒ダミー」、「母親大卒わからないダミー」のそれぞれのベクトルを表す。

第2項 分析結果および結果の解釈

表 3-3 子どもの学歴の決定要因に関する分析

被説明変数	学歴（大卒ダミー）		
	係数	有意水準	標準誤差
読書ダミー	-0.0241138		0.0310412
整理ダミー	0.0038537		0.0255218
しつけ厳しいダミー	-0.0715225	***	0.0268511
仕事に誇りダミー	-0.1114527	***	0.0254324
楽しそうに生活ダミー	0.0616248	**	0.0306693
人づきあいダミー	-0.0073083		0.0256227
教育熱心ダミー	0.0868936	***	0.0320089
手作り料理ダミー	0.0103998		0.0226519
家族の仲がよいダミー	-0.0006246		0.0264209
規則正しくダミー	0.0266463		0.0278311
礼儀マナーダミー	0.0191994		0.0270703
我慢ダミー	71025		0.0316037
自分でできることはやるダミー	-0.0384696		0.0285434
家事手伝うダミー	-0.0790206	***	0.028753
友達を大切ダミー	0.0183021		0.0309632
勉強するダミー	0.1987369	***	0.0354018
先生の言うことを聞くダミー	-0.0711419	**	0.0339852
無駄遣いしないダミー	0.0756135	***	0.0267684
好き嫌いしないダミー	0.0369249		0.026336
自分のやりたいことをやるダミー	0.0075554		0.0304132
迷惑をかけないダミー	-0.0102775		0.0247513
家計ゆとりダミー	-0.0445558		0.0360135
家計ややゆとりダミー	0.0196326		0.0252324
家計やや苦しかったダミー	-0.0361865		0.0276352
家計苦しかったダミー	-0.1596104	***	0.0379314
家計わからないダミー	-0.0746832		0.1126561
父親大卒ダミー	0.1620605	***	0.0254808
父親大卒わからないダミー	0.1133087		0.0693809
母親大卒ダミー	0.1450415	***	0.0288546
母親大卒わからないダミー	-0.1580837	***	0.0627368
定数項	0.4186339	***	0.0212829

注：***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 3-3 から親の様子、しつけが子どもの学歴に及ぼす影響の推定結果を示している。

親の様子群では、学歴(大卒ダミー)に対して、「しつけ厳しいダミー」、「仕事に誇りダミー」が負に有意、「楽しそうに生活ダミー」、「教育熱心ダミー」が正に有意であった。それぞれの項目の係数から、親のしつけが厳しかったら大卒になる確率が約 7%ポイント低く、親が仕事に誇りを持っていたら大卒になる確率が約 11%ポイント低く、親が楽しそうに生活していたら大卒になる確率が約 6%ポイント高く、親が教育に熱心であったら大卒になる確率が約 9%ポイント高いということがわかった。

親が重視していたしつけ群では、学歴(大卒ダミー)に対して、「家事手伝うダミー」、「先生の言うことを聞くダミー」が負に有意、「勉強するダミー」、「無駄遣いしないダミー」が正に有意であった。それぞれの項目の係数から、家事を手伝うようにしつけを受けた子供は大卒になる確率が約 7%ポイント低く、先生の言うことをしっかり聞くようにしつけを受けた子供は大卒になる確率が約 7%ポイント低く、いい学校に入るように勉強するようにしつけを受けた子供は大卒になる確率が約 20%ポイント高く、お金の無駄遣いをしないというしつけを受けた子供は大卒になる確率が約 7%ポイント高いということがわかった。

注目している変数以外の影響は、以下の通りである。

子どもの学歴(大卒ダミー)に対して、「父親大卒ダミー」、「母親大卒ダミー」が正に有意、「家計苦しかったダミー」、「母親大卒わからないダミー」が負に有意であった。それぞれの係数から、父親が大卒の子どもは、父親が大卒ではない子どもよりも大卒になる確率が約 16%ポイント高く、母親が大卒の子どもは、母親が大卒ではない子どもよりも大卒になる確率が約 15%ポイント高く、家計が苦しい家で育つと家計が平均的な家よりも大卒になる確率が約 16%ポイント低く、母親が大卒かどうかわからない人は、母親が大卒ではない人よりも、大卒になる確率が約 16%ポイント低いということがわかった。

上記の結果で有意となった項目について、それぞれ分析結果の解釈をしていく。それぞれの項目が、家庭の経済的状況や親の学歴を統制したうえで有意であったことを考慮する。

「しつけ厳しいダミー」が学歴に対して負に有意であったことから、この親の様子は、子どもに勉強させることを強要してしまうことで、子どもの自主性、勉強に対するやる気を奪っている可能性がある。「仕事に誇りダミー」は学歴に対して負に有意であった。このような親の様子は、仕事に対して、親が過剰に自信を持つことに繋がっていて、それを子どもに押し付けているとも解釈できる。したがってこのような特徴を持つ親は、子どもの学歴に対する価値観も自身の経験をもとに形成してしまっている可能性があり、それを子どもに押し付けているのかもしれない。上記の「しつけ厳しいダミー」と補完的な関係にあると考えられる。また、「楽しそうに生活ダミー」は学歴に対して正に有意であった。このような親は子どもに対して、学習面、生活面でのプレッシャーをそれほど与えないと考えられる。したがって子どもがのびのびと学習できることが、学歴を押し上げる効果を持つと考えられる。

「教育熱心ダミー」が学歴に対して正に有意であったことから、このような親の様子は、子

どもに勉強をさせて、認知能力を養わせる効果を持つと考えられる。「家事手伝うダミー」が学歴に対して負に有意であったことから、子どもに家事をさせるという行為は、その程度にもよるが、子どもの勉強時間を削ってしまっている可能性が考えられる。「勉強するダミー」が学歴に対して正に有意であり、係数も非常に高いことから、このような親のしつけは、子どもの学力を大きく上げると考えられる。また、いい学校に入れるように、と目的をはっきり提示していることも子どもの勉強に対するやる気を押し上げる効果があると考えられる。「先生の言うことを聞くダミー」は学歴に対して負に有意であった。このしつけを受けた子どもは、先生から言われたとおりにだけ行動してしまう可能性があるため、自主性、創造性をそこまで持たないことが考えられる。したがって、子どもの学力向上には自主性や創造性が重要であることが示唆される。また、この項目は上記の「しつけ厳しいダミー」と補完的な関係にあると考えられる。「無駄遣いしないダミー」が学歴に対して正に有意であったことから、このような親のしつけは、学習するうえで重要である計画性を養わせるものとも考えられる。

学歴に対する影響のあった項目の全体の傾向として、年収にも大きく影響を与えた項目が同様に学歴にも影響を与えることがわかった。特に、子どもに価値観を押し付け、自主性を奪うような項目は学歴を押し下げる可能性があることが考えられる。

第4節 男女分けて再分析

第3節までの分析では、男女によって雇用形態や親の教育の仕方に違いがあるということを考慮していなかった。本項では、補助的な分析として男女分けてそれぞれ分析する。また、結果の解釈については、前節までの結果と異なる、新しく発見された事項について示していく。

第1項 推定式

推定式については、第2, 3節で用いた推定式をそのまま用いる。分析対象を「男性のみ」と「女性のみ」に分けて分析する。

男女別の分析に使用した項目についての基本統計量は以下の通りである。

表 3-4 基本統計量(男性)

変数名	サンプルサイズ	平均	標準偏差	最小値	最大値
年収	1,182	4,381,768	2,222,592	750,000	17,500,000
学歴 (大卒ダミー)	1,250	0.5936	0.4913575	0	1
読書ダミー	1,250	0.0864	0.2810663	0	1
整理ダミー	1,250	0.2056	0.4043011	0	1
しつけ厳しいダミー	1,250	0.204	0.4031303	0	1
仕事に誇りダミー	1,250	0.3056	0.4608455	0	1
楽しそうに生活ダミー	1,250	0.2048	0.4037169	0	1
人づきあいダミー	1,250	0.316	0.465099	0	1
教育熱心ダミー	1,250	0.1576	0.3645114	0	1
手作り料理ダミー	1,250	0.6104	0.4878547	0	1
家族の仲がよいダミー	1,250	0.2536	0.4352454	0	1
規則正しくダミー	1,250	0.228	0.4197105	0	1
礼儀マナーダミー	1,250	0.3632	0.4811143	0	1
我慢ダミー	1,250	0.164	0.3704238	0	1
自分でできることはやるダミー	1,250	0.2368	0.4252887	0	1
家事手伝うダミー	1,250	0.1472	0.354447	0	1
友達を大切ダミー	1,250	0.1632	0.369696	0	1
勉強するダミー	1,250	0.1208	0.3260251	0	1
先生の言うことを聞くダミー	1,250	0.1384	0.3454575	0	1
無駄遣いしないダミー	1,250	0.2408	0.4277403	0	1
好き嫌いしないダミー	1,250	0.2424	0.4287065	0	1
自分のやりたいことをやるダミー	1,250	0.1424	0.3495998	0	1
迷惑をかけないダミー	1,250	0.3856	0.4869315	0	1
家計ゆとりダミー	1,250	0.0752	0.2638193	0	1
家計ややゆとりダミー	1,250	0.2168	0.4122302	0	1
家計やや苦しかったダミー	1,250	0.1752	0.3802902	0	1
家計苦しかったダミー	1,250	0.0784	0.2689076	0	1
家計わからないダミー	1,250	0.0048	0.0691432	0	1
父親大卒ダミー	1,250	0.2784	0.4483908	0	1
父親大卒わからないダミー	1,250	0.056	0.2300137	0	1
母親大卒ダミー	1,250	0.2	0.4001601	0	1
母親大卒わからないダミー	1,250	0.072	0.2585914	0	1
男性ダミー	1,250	1	0	1	1
年齢	1,250	31.0504	2.892223	25	35
国立大卒ダミー	1,250	0.1824	0.3863284	0	1
公立大卒ダミー	1,250	0.0272	0.1627309	0	1
私立大卒ダミー	1,250	0.372	0.4835318	0	1
その他大卒ダミー	1,250	0.012	0.1089288	0	1

表 3-5 基本統計量(女性)

変数名	サンプルサイズ	平均	標準偏差	最小値	最大値
年収	739	2,585,927	1,598,841	750,000	17,500,000
学歴（大卒ダミー）	1,250	0.3496	0.4770345	0	1
読書ダミー	1,250	0.1536	0.3607092	0	1
整理ダミー	1,250	0.236	0.4247921	0	1
しつけ厳しいダミー	1,250	0.2912	0.4544973	0	1
仕事に誇りダミー	1,250	0.392	0.4883921	0	1
楽しそうに生活ダミー	1,250	0.2528	0.4347912	0	1
人づきあいダミー	1,250	0.3312	0.4708332	0	1
教育熱心ダミー	1,250	0.1672	0.3733037	0	1
手作り料理ダミー	1,250	0.6912	0.4621834	0	1
家族の仲がよいダミー	1,250	0.3136	0.4641416	0	1
規則正しくダミー	1,250	0.2792	0.4487856	0	1
礼儀マナーダミー	1,250	0.4392	0.4964882	0	1
我慢ダミー	1,250	0.1944	0.3958965	0	1
自分でできることはやるダミー	1,250	0.3216	0.4672773	0	1
家事手伝うダミー	1,250	0.2408	0.4277403	0	1
友達を大切ダミー	1,250	0.1928	0.3946552	0	1
勉強するダミー	1,250	0.1024	0.303295	0	1
先生の言うことを聞くダミー	1,250	0.1432	0.3504169	0	1
無駄遣いしないダミー	1,250	0.232	0.4222779	0	1
好き嫌いしないダミー	1,250	0.2448	0.4301406	0	1
自分のやりたいことをやるダミー	1,250	0.1704	0.3761343	0	1
迷惑をかけないダミー	1,250	0.4376	0.4962895	0	1
家計ゆとりダミー	1,250	0.1088	0.3115127	0	1
家計ややゆとりダミー	1,250	0.2232	0.416558	0	1
家計やや苦しかったダミー	1,250	0.1616	0.3682308	0	1
家計苦しかったダミー	1,250	0.0736	0.2612233	0	1
家計わからないダミー	1,250	0.0096	0.0975472	0	1
父親大卒ダミー	1,250	0.2824	0.4503471	0	1
父親大卒わからないダミー	1,250	0.0448	0.2069474	0	1
母親大卒ダミー	1,250	0.1784	0.3830023	0	1
母親大卒わからないダミー	1,250	0.052	0.2221159	0	1
男性ダミー	1,250	0	0	0	0
年齢	1,250	30.8064	2.862634	25	35
国立大卒ダミー	1,250	0.0768	0.2663804	0	1
公立大卒ダミー	1,250	0.0176	0.131545	0	1
私立大卒ダミー	1,250	0.2496	0.4329547	0	1
その他大卒ダミー	1,250	0.0056	0.0746532	0	1

第2項 分析結果

表 3-6 男女別子どもの年収の決定要因分析(大卒ダミーあり)

分析対象	男性のみ			女子のみ		
被説明変数	年収（大卒ダミーあり）			年収（大卒ダミーあり）		
	係数	有意水準	標準誤差	係数	有意水準	標準誤差
読書ダミー	-96754.78		239484.2	-54892.4		174905.6
整理ダミー	199911.8		174728.4	-120445.2		154701.1
しつけ厳しいダミー	-395822.8	**	185524.4	-28888.4		162512.1
仕事に誇りダミー	-299504.2	*	175060.6	-196102.4		159371.7
楽しそうに生活ダミー	89138.61		209983.6	166141.6		190515.3
人づきあいダミー	266796.4		171350.4	-39653.59		158383.2
教育熱心ダミー	391143.9	*	214159.3	62969.61		193796.6
手作り料理ダミー	-48593.37		146061.2	152838.8		146200.3
家族の仲がよいダミー	-332414.4	*	181022.9	72324.35		161210.6
規則正しくダミー	18653.48		194603.3	255033.6		164428.5
礼儀マナーダミー	59060.2		182388.9	-174921.7		167232.6
我慢ダミー	266114.8		221208	-15817.23		187687.4
自分でできることはやるダミー	359160.6	*	197865.2	16006.03		179631.6
家事手伝うダミー	-168657.3		214615.9	21166.09		172472.7
友達を大切ダミー	-139816.3		219048.3	115829.4		172816.4
勉強するダミー	-146735.7		220948.3	120617.9		228265.2
先生の言うことを聞くダミー	-231176.7		230300.8	-189635.1		203466.4
無駄遣いしないダミー	2961.613		177871.3	-55532.59		167246.8
好き嫌いしないダミー	34038.83		177209.9	100543.2		162390.2
自分のやりたいことをやるダミー	76077.97		207603.5	218197.9		176311.4
迷惑をかけないダミー	-105541.6		163495.4	59883.81		159535.1
家計ゆとりダミー	588714.9	**	256560.9	132440.6		206384
家計ややゆとりダミー	282145.6	*	166144.2	-113832.4		152044.3
家計やや苦しかったダミー	150270.4		179619.2	-148567.5		178640.9
家計苦しかったダミー	123435.4		249593.3	-433032.3	*	235517.1
家計わからないダミー	565875.3		881909	-271462.3		564254.4
父親大卒ダミー	140097.5		174550.2	447597.3	***	149254.9
父親大卒わからないダミー	-363776.3		452908.5	110245.5		425257.6
母親大卒ダミー	330107.7	*	191898.5	-195368		171724.8
母親大卒わからないダミー	-13837.46		406516.8	263698.8		399602.4
国立大卒ダミー	1094353	***	181292.2	699406.6	***	216651.7
公立大卒ダミー	898514.5	**	398072	1183523	***	415411.5
私立大卒ダミー	391695.9	***	149533.9	683767.4	***	136438.9
その他大卒ダミー	-1049811	*	586030.3	-263359.4		650623.6
年齢	168168.3	***	21990.83	47997.98	**	20868.34
定数項	-1390117	**	703031.6	629919.6		668368.3

注：***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 3-7 男女別子どもの年収の決定要因分析(大卒ダミーなし)

分析対象	男性のみ			女性のみ		
被説明変数	年収(大卒ダミーなし)			年収(大卒ダミーなし)		
	係数	有意水準	標準誤差	係数	有意水準	標準誤差
読書ダミー	-120427.3		243006.5	-54847.64		177996.5
整理ダミー	196491.1		177643.8	-113040.1		157529
しつけ厳しいダミー	-374121.6	**	188663.6	-47655.38		165252.1
仕事に誇りダミー	-336380.7	*	177666	-295742.8	*	161767.9
楽しそうに生活ダミー	144006.5		213278.4	204306.3		194237.4
人づきあいダミー	222081.4		174000.7	-95383.06		161253.9
教育熱心ダミー	446602.4	**	217679.1	137086		197158.7
手作り料理ダミー	-34021.92		148245.6	172893.9		149089
家族の仲がよいダミー	-296641.3		183875	73436.35		163749.5
規則正しくダミー	77250.37		197397.2	274861.1		167601.1
礼儀マナーダミー	50167.72		185194	-183295.1		170372.4
我慢ダミー	212472.6		224458.7	-14993.12		191432.7
自分でできることはやるダミー	336226.8	*	201053.5	-18373.03		183242.4
家事手伝うダミー	-177815.2		217981.6	-19530.61		175740
友達を大切ダミー	-154693.4		222419.9	140179.7		176355.2
勉強するダミー	-42062		222907	230512.3		231935.1
先生の言うことを聞くダミー	-277203.7		232692.7	-176243		207364.2
無駄遣いしないダミー	31659.31		180684.9	21516.61		170179.9
好き嫌いしないダミー	67687.89		180041.9	135754.7		164999.7
自分のやりたいことをやるダミー	98241.3		210924.5	243087.8		179819.8
迷惑をかけないダミー	-92068.42		166268.9	-23259.56		162265.1
家計ゆとりダミー	472104.4	*	259870.3	172277.2		210350.7
家計ややゆとりダミー	290192	*	168821.7	-120648.8		155018.9
家計やや苦しかったダミー	127405.9		182309.7	-173221		182370.4
家計苦しかったダミー	-31434.75		252326.5	-550269.2	**	239021.2
家計わからないダミー	468787.9		896465.6	-342420.8		575738.1
父親大卒ダミー	215271.3		175206.8	494215.3	***	151269.7
父親大卒わからないダミー	-237624.2		458620.2	223069.5		432686.7
母親大卒ダミー	451380.2	**	194015.8	-93420.57		174265.6
母親大卒わからないダミー	-87064.54		412827.5	94909.74		406438.9
年齢	159697.8	***	22309.05	37058.5	*	21222.04
定数項	-822549.1		709307.7	1265824	*	673494.1

注：***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

表 3-8 男女別子どもの学歴の決定要因分析

分析対象	男性のみ			女性のみ		
被説明変数	学歴（大卒ダミー）			学歴（大卒ダミー）		
	係数	有意水準	標準誤差	係数	有意水準	標準誤差
読書ダミー	-0.0142652		0.0507757	0.0218438		0.037816
整理ダミー	0.0047813		0.0372682	0.0044032		0.0334851
しつけ厳しいダミー	-0.0060202		0.0391988	-0.0854377	**	0.0355505
仕事に誇りダミー	-0.0685615	*	0.0366963	-0.1300879	***	0.0337946
楽しそうに生活ダミー	0.0538297		0.0444372	0.0694761	*	0.0403274
人づきあいダミー	-0.0062515		0.0362803	-0.0466859		0.0346243
教育熱心ダミー	0.0559985		0.0461168	0.0897253	**	0.0424135
手作り料理ダミー	0.0265323		0.0307704	0.0158303		0.0317339
家族の仲がよいダミー	0.0366952		0.0385884	-0.0261908		0.0345627
規則正しくダミー	0.0146441		0.0405486	0.0490916		0.0363911
礼儀マナーダミー	0.0505314		0.0385632	0.0037411		0.0364661
我慢ダミー	0.018675		0.0471792	-0.0157953		0.0406692
自分でできることはやるダミー	-0.0308409		0.0421276	-0.0171653		0.037256
家事手伝うダミー	-0.0305051		0.0456126	-0.0663084	*	0.0357116
友達を大切ダミー	0.0389281		0.0468558	-0.001749		0.0394114
勉強するダミー	0.1992887	***	0.0472804	0.1504696	***	0.0506644
先生の言うことを聞くダミー	-0.160965	***	0.0488846	0.0118768		0.0452645
無駄遣いしないダミー	0.0391422		0.0376458	0.0756655	**	0.036146
好き嫌いしないダミー	0.0139025		0.0376361	0.0248698		0.0354766
自分のやりたいことをやるダミー	-0.0309429		0.0444899	0.0462673		0.0398078
迷惑をかけないダミー	0.0026958		0.0346595	-0.0259674		0.0337177
家計ゆとりダミー	-0.119364	**	0.0542145	0.0587363		0.0464085
家計ややゆとりダミー	0.0381745		0.0352349	0.0142683		0.0342704
家計やや苦しかったダミー	-0.0821594	**	0.0377698	0.001943		0.0382991
家計苦しかったダミー	-0.2177642	***	0.0521026	-0.0873165	*	0.0523625
家計わからないダミー	-0.2291433		0.1920074	0.0924345		0.1327002
父親大卒ダミー	0.1852754	***	0.0363552	0.1494039	***	0.0340877
父親大卒わからないダミー	0.1124049		0.0936045	0.1562799		0.0978912
母親大卒ダミー	0.0915939	**	0.0403042	0.1587386	***	0.0392547
母親大卒わからないダミー	-0.1935744	**	0.0829112	-0.1765366	*	0.0910495
定数項	0.5131253	***	0.0288218	0.3008395	***	0.0299564

注：***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%水準で有意であることを示す。

第3項 結果の考察

表3-6、7、8から以下のようなことが考察できる。親の様子、しつけが年収に影響があるかを確認すると、男性はそれらの影響があることがわかるが、女性はそれらの影響がほとんど見られなかった。これは、男性の方が親の様子、しつけによる影響が、年収に対してより反映されるということである。女性は、男性に比べて就業選択の幅が広く、専業主婦になったり、子育てのためにパート程度の雇用形態にとどまる可能性が男性よりも高い。女性に関して、親の様子やしつけの影響を受けたとしても、それが働き方、年収に反映されるかはわからないということが考えられる。

学歴と親の様子、しつけの関係をみたとき、男性よりも女性の方がそれらの影響が見られた。ただし、男性の方が家庭の経済状況による影響を強く受けていることがわかる。女性は男女を合わせた全体での分析と同じような結果が得られたのに対し、男性は学歴の決定要因として教育投資が重要だと考えられることがわかった。これは、日本に男性は基本的には就業しなくてはならないといった規範があり、そのため勉強することが当たり前になっているため、教育投資を増やして、学力を上げることが学歴に強く影響を与えていると考えられる。女性は、日本に将来必ず働かなくてはいけないという規範はないため、教育投資を増やすということ以外に、親の様子やしつけがそもそも高学歴を望むか、就業を望むかという意識に影響を与えることを通じて、実際に獲得される学歴に与える影響が大きいと考えられる。

第5節 分析のまとめ

本論文では、様々な親の様子やしつけが、子どもの将来の学歴や年収に対してどのような影響を与えているかについて検証した。得られた結果を6点にまとめる。

第1に、「しつけが厳しかった」、「仕事に誇りを持っていた」という親の様子についての2つの項目が、子どもの将来所得に対して負に有意であった。そのため、このような特徴を持つ親は、子どもに自らの経験で培った価値観を押し付け、子どもの主体的な行動や思考を阻害している可能性がある。そうであるならば、親は子どもに対して、それほど強く干渉しないようにし、子どもの行動や思考を制限しないようにすることが子どもの年収を上昇させるのに望ましい。

第2に、「教育に熱心だった」という親の様子についての項目が正に有意であったため、このように親が子どもの学習に興味を持つことも、子どもの将来年収を増加させる可能性がある。

第3に、学歴を統制した分析と統制しない分析により、親の様子、しつけによって、子どもの学歴が変化したことによって、追加的に子どもの年収に影響を与えている部分があるということがわかった。この分析結果を受けて、学歴を被説明変数に置いて親の様子やしつ

けの影響を更に細かく分析した。

第4に、「しつけが厳しかった」、「仕事に誇りを持っていた」、「教育に熱心だった」という親の様子は学歴にも同様に影響を持っていた。

第5に、親が重視していたしつけの項目で「先生の言うことをしっかり聞く」が負に有意で、「しつけが厳しかった」という項目と補完的な関係にあることがわかった。

第6に、「楽しそうに生活していた」という親の様子についての項目が、子どもの学歴に正に有意であった。そうであるならば、子どもが親からのプレッシャーを受けてやらされる学習ではなく、自分の興味のあることをのびのびと学習できる環境が学歴に正の影響を与えると考えられる。

また、補助的な分析として男女を分けて分析してみたが、性別の違いによって、親の様子、しつけが年収に影響するのか、学歴に影響するのか、異なるということがわかった。ただし、親の様子、しつけは、男性なら主に年収に、女性なら主に学歴に影響を及ぼしていて、片方の性別にしか影響しないといったことはなかった。

本分析の全体的な傾向として、子どもの主体性や自主性のような非認知能力の育成を阻害してしまうほど、親自らの価値観を押し付けるようなしつけを子どもに行うということが、問題点として挙げられる。具体的な親の様子やしつけの項目で特に注目すべきなのは、「しつけが厳しかった」、「仕事に誇りを持っていた」といった、子どもに親自身の価値観を押し付けることで、子どもの将来の学歴や所得共に負の影響を与える項目は、特に改善していかなければならない問題である。次章より、我々はこれらの2点の親の様子やしつけに着目して、親が原因で子どもの将来の学歴や所得の減少させてしまうのを防ぐような提言を行う。

第4章 政策提言

第1節 はじめに

前章で、親の行動や習慣が子どもの将来の年収に影響する要因の分析を行った結果、小中学生のころを振り返って、親が「しつけが厳しかった」と小中学生のころを振り返って、親が「仕事の誇りを持っていた」の特筆すべき2つの親の様子が、子どもの将来の学歴と年収に負の影響を与えることが分かった。これらの2つの親の様子は、子どもに親自らの経験より形成した価値観を押し付け、子ども自身の主体的な思考や行動を阻害している可能性がある。子どもの年収を引き上げることを目的とするのであれば、家庭教育や普段の親子の関わりの中で、親が子どもに価値観を押し付けることを抑制させ、子どもたちの主体性や本来持っている個性を伸ばすべきであろう。しかしながら、各家庭のあり方に政府が直接介入することは難しいことに加え、直接的な介入は倫理的な問題がある。そのため、政府が教育制度を改め、学校教育の中で生徒に直接働きかけることで生徒に主体性を養わせる。学校は家庭と同様に、子どもが長く時間を過ごす場であるので、十分に代替の役割を果たすと考えられる。

我々は現行の道徳科の授業に着目した。道徳の授業は、子どもが基本的な社会のモラルやマナー、倫理観を理解し身に付けるためのものであるが、これは、子どもに一定の価値観を植え付け、子どもの主体的な思考や行動を阻害するほどに規範を示している可能性がある。そこで、以下の2つの政策提言を行う。

I. 生徒主体の道徳の授業の実施

II. 生徒の評価を行わない道徳の授業の実施

次節以降では、現行の道徳の授業とその問題点について、政策提言の概要や効果、実現可能性についても詳述する。

第2節 従来の道徳教育

文部科学省『平成27年7月小学校学習指導要領解説特別の科目道徳編及び中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』には、「学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている」と小中学校共通に記載されている。安倍政権では、「特別の教科」という新たな位置づけが設けられ、平成30年から小学校で、平成31年から中学校で「特別の科目道徳」が始まる。この改革実施の契機は、いじめに関する痛ましい事案の多発であった。「考え、議論する道徳」に転換することにより、特にいじめの防止を目指した道徳教育の強化を試みている。

また、文部科学省『【別紙第1】小学校児童指導要録に記載する事項等』によると、数値による評価ではなく、記述式であること、他の児童との比較による相対評価ではなく、児童がいかに成長したかを受け止め、励ます個人内評価として行うこと、現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」、「行動の記録」及び「総合所見及び指導上の参考となる諸事項」などの既存の欄も含めてその在り方を総合的に見直すことなどが、道徳科の具体的な評価の在り方として示された。

次に我々は、従来の道徳教育の在り方についての問題点を2つ挙げ、政策提言へと繋げる。

1つ目は、道徳科の授業形態についてである。文部科学省『平成27年7月小学校学習指導要領解説特別の科目道徳編』及び『平成27年7月中学校学習指導要領解説特別の教科道徳編』でも、従来の学校での道徳教育は、他教科に比べて軽んじられていること、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われている例があるなど、多くの課題が指摘されている。我々は、回答が無いと言いながらも、生徒自身が道徳的に善い行いをするように担任教師が誘導し、回答例を探すだけの読み物の登場人物の心情理解のような道徳科の授業によって、ある一定の価値観を押し付けられているということを問題視する。本来、道徳で学ぶ社会のモラルやマナー、倫理観などは、日常生活で人の気持ちを考えることや団体行動をすることの中で自然に身に付いていくものであり、授業はそれを補完する役割のものであると考える。授業では、いじめをしてはいけないかなどの結論を教師が単に教えるではなく、なぜいじめをしてはいけないのかなどの過程を考えさせ、生徒同士活発に議論を行い、意見を交換することで十人十色な意見や感情を知り、日常に近い実践形式で子どもたちが自然に学ぶことが重要である。よって我々は、学級内での議論を行うことで、様々な意見を知ることができる生徒主体の道徳科の授業を提言する。

2つ目は、道徳科の評価方法についてである。公立学校の成績表に記載される既存の道徳科の評価項目である、「行動の記録」に着目する。文部科学省『【別紙第1】「特別の教科道徳の指導方法・評価等について(報告)」より、行動の記録とは、「特別活動における児童の活動について、各内容ごとにその趣旨に照らして十分満足できる状況にあると判断される場合には、○印を記入する」とある。具体的な項目として、(1)基本的な生活習慣、(2)健康・体力の向上、(3)自主・自立、(4)責任感、(5)創意工夫、(6)思いやり・協力、(7)生命尊重・自然愛護、(8)勤労・奉仕、(9)公正・公平、(10)公共心・公德心の10項目に分かれており、主に担任が生徒を観察し記入をする。しかし、担任教師1人に対し、小学1年生は1学級35人の生徒、小学1年生を除いた小中学生は1学級40人もの生徒で編成されるが、担任教師が試験で数値化されるような成績の他に、生徒各々の特性や日常の行動を把握することは果たして可能であろうか。現在、このような不正確な可能性のある情報が、生徒は自分がどのような人間であるかを客観的に把握し、その親は自分の子どもの学校でのよう様子を判断する材料となっている。また、もし(6)思いやり・協力の項目に○がついていなかったら、自分は思いやりのない人間なのだろうか、自分の何が悪いのだろうか、と不安に

なり、子ども自身が委縮してしまう可能性もある。このような評価方法は、本来持っている子ども自身の個性や長所を潰してしまう成績評価方法ではないだろうか。また、相対評価ではなく個人内評価で行うとあるが、試験のような明確な点数のない生徒自身の日常の言動を評価する際、個人的な感情抜きに個人内評価を行うことが可能だろうか。よって、担任教師が把握できる生徒個人の一面を、1 教師個人の価値観や尺度で測るような道徳科の評価方法は改めるべきであると提言する。

第 3 節 政策提言 I 生徒主体の道徳の授業の実施

【概要】

道徳科の教科書に記載されている読み物を教師が読み、模範解答を説明するだけの道徳科の受け身の授業を改め、生徒自らが考え、自由に意見を交わす生徒主体の授業を行う。生徒自身の倫理観を問う、日常に近いようなシチュエーションを題材として、生徒同士で議論をさせる。1 学級全員での議論であると、人数が多いため、発言の機会が回ってこないからと考える生徒がいる可能性があるため、少人数での議論を行うことで全員が考えて発言する機会を持たせる。少人数での意見が纏まったところで、全員の意見を発表しあう。このような問題に答えはないため、人の意見は否定をしない上で、自分の意見を相手に伝え、議論を行うことを生徒たちに伝える。また、担任教師や文部科学省が考える唯一の道徳的に善い行いや考えに生徒たちが誘導されることがないよう、模範解答を生徒に伝えることはしない。

また、道徳科の教科書は、上記のような議論を学級内で行うことを前提として、従来の読み物中心の教科書を改め、学級内で行う議論の題材を載せることを中心とする。議論の題材例としては、いじめのようなモラル反するシチュエーションに加えて、喜びを分かちあうような共感的なシチュエーションも加えることで、日常に近い様々な題材を生徒同士議論する。

【効果】

生徒主体の道徳科の授業では、生徒の主体的な思考や行動を阻害するほどに規範を示すような教師の価値観の押し付けが無くなり、非認知能力である主体性や自主性が育成されることが考えられる。前章で記載したように、非認知能力が向上は認知能力である学力も高めることが明らかにされている。学力の向上によって学歴が上がり、学歴を通じて将来の年収が引き上げられることが期待される。また、議論を行う道徳科の授業の導入の意図の 1 つとして、日常的なシチュエーションでも様々な意見を持つ人がいるということを、生徒同士意見を交わすことで知ることができ、生徒の他者理解を促すとともに、議論の中で自分の感情や考えを言葉にすることで自己理解にも繋がると考えられる。教師が一方的に結果だけを伝える受け身の授業より、生徒同士で議論を行う生徒主体の授業はより一層日常に近い実践

形式となり、効果が高いと考えられる。また、答えが無く、否定をされない議論の中では、発言をしやすいため、主体性が養われることも期待される。そして、教師用の教科書に記載されているような答えを提示しないことで、生徒に一定の価値観を押し付けるような道徳科の授業の改善を図ることができる。

前章の、子どもの将来年収の決定要因分析(大卒ダミー無し)より、本政策の効果の概算を行う。従来の道徳の授業は、「しつけが厳しかった」という親の様子と類似していて、一定の価値観を押し付けて子どもの主体性を奪うものと考えられる。また、実証分析より、しつけが厳しい親の子どもは将来年収が約 24 万円減少するということがわかっている。よってこの政策の導入により、子どもの主体性を尊重する道徳の授業が実施されることで、生徒一人の将来年収が約 24 万円減少するのを防げる可能性がある。

【実現可能性】

平成 30 年度から小学校、平成 31 年度から中学校にて「特別の教科 道徳」が始まるにあたり、「考え、議論する」を目標とする道徳科の授業の改善案として、実現可能性は高い。また、新たな授業の導入はコストがほとんどかからない政策であるという点でも有益である。

第 4 節 政策提言Ⅱ 生徒の評価を行わない道徳の授業の実施

【概要】

公立小中学校の通知表の道徳科の評価欄を改める。特に焦点を当てるのは、「各項目ごとにその学年ごとの趣旨に照らして、十分に満足できる状況にあると判断される場合には、○を記入する」と文部科学省より示されている「行動の記録」である。また従来の道徳科の評価は、数値での評価は行わず、記述式で行われていたが、記述式での評価も通知表には記載しないこととする。公立小中学校の通知表に記載するのは、国語科や数学科のような試験によって、各科目における生徒の理解度が明確な数値により明らかになる教科のみを記載し、部活動や生徒会などの実際の活動記録を除いた生徒の行動や、生徒自身の倫理観を評価するような項目は一切記載しない。

また、生徒の言動があまりにもモラルに欠け、他の生徒や学校に迷惑が掛かっている場合は、教師が親や子どもに緊急に連絡を取り、対面でのコミュニケーションにて問題を解決するなど、教師には臨機応変な対応が求められる。

【効果】

従来の公立小中学校の通知表の「行動の記録」の欄にあった、具体的な評価項目を提示しないことにより、必要以上に生徒自身が自分の価値を下げ、委縮してしまう可能性を無くすることができる。また、記述式においての担任教師からの生徒自身の倫理観や日常生活での行動についての記載も避けることで、生徒の一面のみしか把握していない 1 担任教師の断片的な情報により、生徒本来の個性や性格を決めつけることを防ぐ。また、子どもの通知表を見た親が、教師からの子どもの断片的な評価によって、家庭内での過度なしつけを促してしまう可能性を下げることも期待できる。

また、学期末に学級人数分の通知表は、道徳科を除いた各科目の成績のみ記載すれば良いため、担任教師が各生徒の日常生活を振り返り、道徳科の評価欄に記述をする時間的なコストが削減できる。それにより、より一層授業に注力することが期待される。

前章の分析の、子どもの将来年収の決定要因分析(大卒ダミー無し)より、本政策の効果の概算を行う。教師が道徳の評価をするという従来の制度では、子どもの通知表を見た親が、教師からの子どもの断片的な評価を見て、その影響で親がしつけを厳しくしている可能性がある。また実証分析から、親がしつけを厳しくすることで、子どもの将来年収を 24 万円下げていることがわかっている。よってこの政策の導入により生徒一人の将来年収が約 24 万円減少してしまうのを防げる可能性がある。

【実現可能性】

道徳科の改革が検討されている今、「考え、議論する道徳」の授業とともに、本政策の道徳科の授業において生徒の評価を行うことで、道徳科の授業の相乗効果が発揮されることが期待されるため、実現させる価値が非常に高い政策だと言える。また、本政策は、全国の公立小中学校に一斉導入を実施しても、導入コストがそれほどかからないだけでなく、担任教師の通知表作成のコストを削減できるため、コストの面から見た実現可能性は高いと考えられる。

第 5 節 政策提言 まとめ

現在検討されている教育無償化がより一層効果のある政策にするためには、子どもに価値観を押し付けず、生徒の主体性や自主性を伸ばすことが鍵である。政府が各家庭に介入することは現実的には難しいため、政府が教育制度を改め、学校教育の中で生徒に直接働きかけることで生徒に主体性を養わせることで代替する、以下の 2 の政策を提言する。

I. 生徒主体の道徳の授業の実施

II. 生徒の評価を行わない道徳の授業の実施

これらの政策により、大人によって押し付けられた価値観ではなく、子ども自らが価値観を形成していくことや、子どもの主体性や自主性のような非認知能力の向上を期待できる。

そして最終的には、子どもの将来の学歴や所得に良い影響を与える。

また、Moretti (2014) より、大卒者は知識や技術の伝播などを行うことで、周囲の高校中退者には 1.9%、高卒者には 1.6%、大卒者には 1.2%の賃金上昇をもたらす、スピルオーバー効果を持つことを明らかにされている。よって、個人の教育水準の向上が社会全体の生産性の向上に繋がることも期待されるために、本政策は子ども自身にとっても社会にとっても非常に貢献的である。

おわりに

本稿では、格差是正のため貧困の世代間連鎖を断ち切ることを目的とし、その手段として親の習慣や行動に着目した。既に莫大な財政赤字を抱える本国で財政出動を行わない政策を打ち出すことは非常に重要であるとともに、子どもと最も長い時間関わるのは親であり、子どもにとって親の影響は大きいと考えたからである。

現状分析で、日本の貧困の世代間連鎖の現状が大きな問題として浮かび上がってきた。そこで、最も子どもと長い時間を過ごす親の習慣や行動が、貧困の世代間連鎖を断ち切れない一因となっていると考え、分析を行った。

分析では、子どもの頃の親の様子や意識して行っていたしつけなどを特に重要視する被説明変数として置き、子どもの将来の所得に与える影響について検証し、しつけを厳しく行うこと、親の価値観を子どもに押し付けていることが子どもの学歴や所得を引き下げていることを明らかにした。分析結果を踏まえて、子どもに価値観を押し付けず、生徒の主体性や自主性を伸ばすことが、子どもの将来の所得にも好影響を及ぼすと解釈を得たことを政策提言へと繋げる。1つ目の政策提言である「生徒主体の道德の授業の実施」では、受け身の授業ではなく、議論の題材に対して生徒自らが自由に考え、意見を交わす生徒主体の授業を行うことで非認知能力である主体性や自主性が育成されることが期待できる。2つ目の政策提言である「生徒の評価を行わない道德の授業の実施」では、現在の通知表の道德の評価欄である行動の記録や、記述形式の道德の評価方法に着目し、通知表に生徒自身の倫理観を評価するような項目を一切記載しないように改めることで、生徒自身が自分の価値を下げ、委縮してしまう可能性をなくすることができる。

各家庭のあり方に政府が直接介入することに加え、直接的な介入は倫理的に問題がある。そのため今回の政策提言では政府が教育制度を改め、学校教育の中で生徒に直接働きかけることで、生徒に主体性を養わせることを目指す。学校は子どもが1日の長くを過ごす場であり、十分に本政策の効果が期待できる。

現在、教育無償化が安倍政権の政策として掲げられているが、日本の財政に更なる負担をかけることなく、補完的な政策提言を行うことが、本稿が貢献できる点である。

最後にアンケート調査及びデータを提供していただいたベネッセ教育総合研究所様、本稿の執筆にあたりご指導を頂いた安井健悟先生へ感謝の意を表す。また本研究が、子どもたちの本来の能力や努力の成果を発揮できる社会の実現と、現在検討中の教育無償化と道德教育の改革により一層の効果を果たせる一助となることを願い、本稿の締めとする。

先行研究・参考文献

- 厚生労働省(2013)「貧困・格差の現状と分厚い中間層の復活に向けた課題」
(<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/roudou/12/dl/02-1.pdf>) (データ取得 2017/11/01)
- 大竹文雄・小原美紀(2010)「所得格差」
- 安井健悟(2015)「所得格差と賃金格差」
- 中室牧子(2015)『「学力」の経済学』Discover
- 安井健悟・佐野晋平(2009)「教育が賃金にもたらす因果的な効果について - 手法のサーヴェイと新たな確定」『日本労働研究雑誌 No. 588』
- 厚生労働省「所得再分配調査結果平成 8 年」
(http://www1.mhlw.go.jp/toukei/h8syotoku_4/kekka-c.html) (データ取得 2017/11/02)
- 統計省統計局 「統計 Today No. 53」
(<http://www.stat.go.jp/info/today/053.htm>) (データ取得 2017/11/01)
- 厚生労働省「平成 28 年国民生活基礎調査の概況」
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/03.pdf>)
(データ取得 2017/11/01)
- 厚生労働省「平成 26 年度所得再分配調査報告書」
(<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12605000-Seisakutoukatsukan-Seisakuhyoukakanshitsu/h26hou.pdf>) (データ取得 2017/11/01)
- ユニセフ報告書「イノチェンティレポートカード 13 子どもたちのための公平性：先進における子どもたちの幸福度の格差に関する順位表」解説：阿部彩
- 川口俊明(2011)「日本の学力研究の現状と課題」
- 文部科学省ホームページ「平成 21 年度文部科学白書」第 1 章家計負担の現状と教育投資の水準
(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200901/detail/1296547.htm) (データ取得 2017/11/04)
- 樋口美雄(1992)「教育を通じた世代間所得移転」『ESRI Discussion Paper Series No. 69 日本教育経済学：実証分析の展望と課題』
- 渡辺行郎(1987)「学校歴による人材選別の経済効果——一つの模索」市川昭午編『教育の効果』東信堂
- 竹内洋(1989)「新規大卒労働市場における「ねじれ」効果」『京都大学教育学部紀要』No. 35
- 戸田淳二、鶴光太郎、久米功一(2014)「幼少期の家庭環境、非認知能力が学歴、雇用形態、賃金に与える影響」『RIETI Discussion Paper Series 14-J-019』
- 厚生労働省「平成 28 年賃金構造基本統計調査」
(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2016/dl/06.pdf>)
(データ取得 2017/11/04)

文部科学省「結果の概要—平成 26 年度子共の学習費調査」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa03/gakushuui/kekka/k_detail/___icsFiles/afielddfile/2015/12/24/1364721_3.pdf) (データの取得 2017/11/04)

内閣府「平成 21 年度年次経済財政政策担当報告(経済財政政策担当大臣報告書)—危機の克服と持続的回復への展望—平成 21 年 7 月内閣府、第 3 章雇用・社会保障と家計行動」

(<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je09/pdf/09p03011.pdf>) (データ取得 2017/11/01)

内閣府「平成 26 年版 子ども・若者白書(全体版)」

(https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc13j.pdf) (データ取得 2017/11/01)

文部科学省「【別紙第 1】「特別の教科道德の指導方法・評価等について(報告)」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1288251)

文部科学省「【別紙第 1】小学校児童指導要録に記載する事項等」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/attach/1288251) (データ取得 2017/10/30)

文部科学省「平成 27 年 7 月中学校学習指導要領解説特別の教科道德編」

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afielddfile/2016/08/10/1375633_8.pdf) (データ取得 2017/10/31)

文部科学省「平成 27 年 7 月小学校学習指導要領解説特別の教科道德編」

(https://doutoku.mext.go.jp/pdf/elementary_school_02.pdf) (データ取得 2017/11/1)

Enrico Moretti(2004) “*Estimating the social return to higher education: evidence from longitudinal and repeated cross-sectional data*”